プラトン著作中世ビザンツ写本 Parisinus graecus 1807 fol. 1r col. 1 - fol. 14r col. 1
（『クレイトポン』、『国家』第 1 巻）に付されたる疑問符の形態、出所、特質について

瀧　章次

1　はじめに

プラトンにとって、対話を描く技法、とりわけソクラテスの対話を描く技法はどのようなものであったか。本研究は、プラトン著作中世写本 Parisinus graecus 1807（以下「写本 A」）における「疑問符」とされる符号の形態、出所、特質の調査結果を通して、この問題に関する若干の考察を加えるものである。

現代のプラトンの読者は、近代の校訂を通して、現在の句読法に慣れ親しんでいるが、しかしながら、それは原著者プラトンの手になるものではない。句読法が体系的に整備され始めたのは、9 世紀以降のことである。戯曲における話者の交代を示す「：」の記号はパピルス文書に見られるが、一貫して用いられる区切り記号はない (*e.g.* Oxyrhynchus 455,　PMil Vogliano I 10)。とりわけ、疑問符となると、形態として「；」または、話者交代の記号「：」の下方に「,」を付した符号として、写本を直接判読した者によって報告されてきているけれども、この符号が現われるのは、9 世紀を遡ることはない。写本上の疑問符は、本文の書写とは別に、アクセントや気息記号と共に、インクや筆記具、運筆の違いから、後から別の手で付け加えられたものであると判断されることが多く、近代の校訂者は、それぞれの責任で、形態「；」の疑問符を付してきた[1]。従って、現代の読者が「ソクラテスの問答」として、問いと答えの応酬を、印刷された疑問符を通じて、受け取っている時、実際には、その都度、校訂者によって作られた「問答」を受け取っているのである。それゆえに、批判的にプラトン自身の本文を再構成する場合には、校訂本の疑問符は、括弧に入れて、熟慮、再考しつつ読むべきであり、ソクラテスの問答というものも、こうした吟味の上に考えるべきものである。実際、校訂の際に写本の句読法の異同は重要視されていない。中世写本の「疑問符」とされる符号については、写本に書かれているという報告はあっても、それ以上、その特質を考察するということは、本文再構成上関心の対象とはなってこなかった。本研究で扱う写本 A についても、「疑問符」は、本文書写の写字生の手とは別の後の手によるものという報告以上に、多く顧みられることはなかった。

しかし、従来の報告に対して、改めて写本を見てみるとき、従来「疑問符」と報告されてきた句読法について、それが、本文を書写したその手によるものであったと仮定することの方が有力であるということになるならば、事はどうなるであろうか。もちろん、そうなったからといって、直ちに、「疑

---

[1] 句読法、疑問符に関する常識については、Gardthausen, vol. 2, 394-410; Pfeiffer, 178-181; Thompson, 1912, 60; id. 1966, 4, 9, 67-70; Turner, 57, 92。以下文献の引用は、紛れがない限り、著者と該当箇所のみによる。詳細は巻末参考文献を見よ。

問符」を付し疑問文と解釈する読みが、9 世紀をさらに遡って、古代にまで届くということの保証はないであろう。 さりながら、写本 A は、プラトン著作に関する現存写本のうちで最も古いものであり[2]、また、同時期の MS E.D. Clarke 39（以下「写本 B」[3]）と較べて「疑問符」の形も定まっていないものであり、しかも、古典文献学史上、9 世紀という uncial 体から minuscule 体へと書き換えられ、素材が、パピルスから羊皮紙へと転換する、古代からの伝承がその後へと受け継がれる重要な時期のものであるということとなると、その「疑問符」は、俄然、重要な伝承の証拠となろう。そして、では、一人の手によって、どのように作り出されているのか、本文に付すに当たってその基準は何であったのか、原本を写すに当たって本文に続いて「疑問符」を付すことの指示は、何に、また、誰に由来するのか、これらのことがらを改めて調べ吟味する意義を担うものとなろう。現代の批判的読者にとって、疑問符は読者の責任で付すという常識が直ちに変わることはないが、「疑問符」の生成に関わる他の写本との比較吟味によっては、9 世紀より遡る古代の読みに繋がる手がかりを与えてくれる可能性は残されている。実際、近年この写本の研究に取り組み、『クレイトポン』、『国家』の新たな校訂を成し遂げた R. Slings は、『クレイトポン』校訂本の巻末付録 (342) において、句読法が後代の拵え物だと考える古典文献学の常識は作り話だと批判している。確かに、Slings 自身は、この批判で、疑問符のことを念頭においていたか、その校訂における疑問符の扱い方から、怪しまれるが、今後の「疑問符」生成に関する調査の為に、写本 A における「疑問符」とされる符号の特質を確認しておくことは、プラトンが対話を描く技法を考察する目的にとって意義を持つと考える。

本稿では、「疑問符」に関し、写本 A の一部、『クレイトポン』と『国家』第 1 巻に限定して、調査を行なった。『クレイトポン』を選んだのは、Slings が「作り話」と批判するする意図を見定めるためであると同時に、異なる作品間で句読法に変更がないかを確認するためである（なお、同じ筆、同じ記号が、使われていることが結果として判明した）。また、『国家』第 1 巻を選んだのは、写本 A に書写されている Thrasylus による Tetralogy の VIII、IX に配置された作品の中でも、ソクラテスの問答として、文法的特性から疑問文がもっとも頻繁に現われるものであり、「疑問符」とされる符号の付され方を検討するための材料をもっとも多く与えてくれるからである[4]。写本 A 全体の「疑問符」に関しては今後、先の写本 B、古代のプラトン著作流布本の系譜とされる 14 世紀の写本 cod. Vindbonensis 55, suppl. phil. gr. 39 （以下「写本 F」）、そのほかの 9 世紀の写本の「疑問符」と合わせた総合的な検

---

[2] 写本 A の筆跡は、小文字 α、κ、λ、μ、π の形から言って、Gardthausen vol. 2 巻末図表によれば、９世紀以降の写本と考えられる（cf. Boter, 45-48, 88-91）。

[3] フォティオスの弟子、カッパドキアのカイサリアの大主教アレタスのために、John the Calligrapher が、895 年に作成した写本。「：」と「､」が一体となった疑問符が見られる（fol. 368^{v} 『ゴルギアス』冒頭部 447a-b (Wilson, Pl. 14)）

[4] 近年のプラトンの写本の校訂について、とりわけ、『国家』篇に関する Boter の研究、それに基づく Slings の新校訂について、さらには、『国家』篇第 1 巻における Slings の校訂の実際については、納富を見よ。なお、「疑問符」等、おそらく諸家の句読法に関する常識を受けて、句読法は特に問題とはなっていない。

討の機会まで待つこととする。

本稿は、2007 年 8 月末にフランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France) から入手した白黒マイクロフィルムに基づくもので、判読に当たっては、城西国際大学図書館に設置されているマイクロフィルムリーダー FUJIX DDIP6200 を用いた。

以上から本研究は、中間報告であり、その仮説とそれに基づく考察は、次の条件に制約されたものである。（1）原物ではなく白黒マイクロフィルムによる写しに基づいている。（2）マイクロフィルムリーダー接続のコピー機が作り出す像は原物を完全に忠実に写しているか疑う余地がある。（3）写本Ａの全体を調査してはいない。（4）9 世紀－ 10 世紀のそのほかの写本 (cf. Allen) や、プラトンの写本Ｂ全体、写本Ｆとの比較を行なっていない。

以下においては、2 において、「疑問符」が付されている箇所を提示し、3 においてそれらの箇所における「疑問符」の形態に関する観察、分類を提示し、4 において、そこから得られる、「疑問符」を付した手に関する従来とは異なる仮説、本文書写の手がまた多くの「疑問符」を付したとする仮説を提出する。この仮説に基づいて、「疑問符」を付した手における、「疑問符」を付すに当たっての基準を明らかにするために、5 において、文法的・意味論的に明示的に疑問文としての特徴のある箇所における「疑問符」の有無、6 において、そのような特徴のない箇所における「疑問符」の有無、この 2 点に関する調査結果を提示する。そして、この調査結果をもとに、7 において、本文書写の際に「疑問符」を付した基準を考察し、そこから得られるプラトンの技法に関する意義を述べる。

なお比較対照として、近代の校訂における疑問符の有無についても調べ記録した。『クレイトポン』の場合、Burnet、Souilhé、Slings の校訂を、『国家』第 1 巻の場合、Musurus (editio princeps 1513 年)、Stephanus (1578 年)、 Bekker、Ast、Schneider、Stallbaum、Hermann、Jowett & Campbell、Adam、Burnet、Shorey[5]、Chambry、Slings の校訂を調べた。 以下 5.1-5.5 においては、近代の校訂はいずれも疑問符を付すので、重要でない限り、逐一対照を記さない。5.6 以下、対照を括弧内に示す。調査した諸家が一致する場合、editors の略号 edd. で示す。『国家』第 1 巻については、Ficinus のラテン語訳（1491 年）も調べた。校訂者ではないが、edd. とある場合、その中に含めてある。小文字 q は question mark の略号で校訂者、翻訳者が疑問符を付している場合を指す。nq とあるのは、non-question mark の略号で、句読法が何もない場合も含め、comma, semicolon、fullstop が付されている場合を指す。小文字 f は full stop の略号で校訂者、翻訳者が終止符を付している場合を指す。c. は、ceteri 「そのほか」を指す。

なお、5 において、文法的・意味論的に明示的には疑問文の特徴をもたない箇所における「疑問符」の有無を調査する際、写本 A が、「疑問符」を付している箇所で、19 世紀以降の校訂すべてにおいて疑問符がない場合、番号の右肩に＊を付す。また、写本 A が「疑問符」を付していない箇所で、19 世紀以降の校訂すべてにおいて疑問符がある場合、番号の右肩に＊＊を付す。

また、テキスト上の参照箇所については、Stephanus 版のページと区切りを示すアルファベットを先ず示し、括弧内に、写本Ａの箇所を示す。その場合、ページ 1 枚ごとに右ページ右上につけられたペー

---

[5] 序で Hermann のテキストに基づいていると述べているが (I, xlv)、疑問符については、断り書きなしに、異なっている箇所があるので、調査対象とする。

ジ付けを、folium の略号、fol. とアラビア数字で示し、アラビア数字の右肩に小文字でつけられた、r は recto、右ページを示し、v は左ページを示す。写本 A は、folio の紙型（タテ約 36㎝、ヨコ約 24㎝）で各ページ二つのコラムが配列され、各列は、各行不定、約 20 の文字数で、44 行からなる。文字の大きさは、２～３㎜四方。そこで、col. を columna の略号として、各ページ左コラムは、col. 1、右コラムは、col. 2 で示す。行は linea の略号 l. を用いて示す。

2 「疑問符」の付されている箇所

（なお写本 A に関する本稿の記載について、語末の σ は、写本 A の字体に倣って、ς とせず、σ としてある。また、文末には記号を付していない。終止符あるいは疑問符と判断する場合を除いて、写本 A の区切り記号については、本稿では、主に「　」を用いているが、写本 A に付されているすべての区切り符号を転記してはいないし、また、近代のセミコロンとコンマの区別を判断して記載しているものでもない。）

2.1 台詞の終わりにある文末

『国家』第 1 巻 1. 327c (fol. 3r col. 1 ll. 33-34) ὁρᾶισ ...ἐσμέν　2. 327c (fol. 3r col. 1 ll. 39-40) ἦ ... ἀκούονταϲ 3. 328a (fol. 3r col. 1 l. 43-fol. 3r col. 2 l. 1)　ἆρα ...τῆι θεῶι 4. 328a (fol. 3r col. 2 ll. 3-5) λαμπάδια ... τοῖϲ ἵπποιϲ 5. 331d (fol. 4v col. 2 ll. 12-14) οὐκοῦν ... κληρονόμοϲ 6. 332a (fol. 4v col. 2 l. 34) ἦ γάρ 7. 332a (fol. 4v col. 2 ll. 34-37) ἀποδοτέον ... ἀπαιτοῖ 8. 332b (fol. 5r col. 1 ll. 7-8) οὐχ ... ϲιμωνίδην 9. 332b (fol. 5r col. 1 ll. 9-11) τί δὲ ... ὀφειλόμενον 10. 332c (fol. 5r col. 1 ll. 30-33)　ἡ δὲ ... καλεῖται 11. 332d (fol. 5r col. 1 ll. 34-36)　ἡ οὖν δὴ ... καλοῖτο 12. 332e (fol. 5r col. 2 ll. 11-12)　μὴ κάμνουϲί ... ἄχρηϲτοϲ 13. 332e (fol. 5r col.2 ll. 13-14) καὶ μὴ πλέουϲι δὴ κυβερνήτηϲ 14. 332e (fol. 5r col. 2 ll. 14-16)　ἆρα καὶ ... ἄχρηϲτοϲ 15. 332e (fol. 5r col. 2 ll. 17-18)　χρήϲιμον ἄρα ... δικαιοϲύνη 16. 333a (fol. 5r col. 2 ll. 19-20)　πρόϲ γε καρποῦ κτῆϲιν 17. 333a (fol. 5r col. 2 ll. 20-21)　καὶ μὴν καὶ ϲκυτοτομική　18. 333a (fol. 5r col. 2　ll. 22-23)　πρόϲ γε ... φαίηϲ κτῆϲιν 19. 333b (fol. 5r col. 2 ll. 33-37)　ἀλλ᾽ εἰϲ ... οἰκοδομικοῦ 20. 333c (fol. 5v col. 1 ll. 6-9)　ὅταν ... τῶν ἄλλων　21. 333d (fol. 5v col. 1 ll. 20-21)　ὅταν δὲ ...ἀμπελουργική 22. 333e (fol. 5v col. 1 ll. 35-39)　ἆρ᾽ οὐχ ... φυλάξαϲθαι　23. 333e6 (fol. 5v col. 1 ll. 39-42)　ἆρ᾽ οὖν ... ἐμποιῆϲαι 24. 334a (fol. 5v col. 1 l. 43- fol. 5v col. 2 l. 3)　ἀλλὰ ... πράξειϲ 25. 334a (fol. 5v col. 2 ll. 3-5)　ὅτου τιϲ ἄρα ... δεινόϲ 26. 334a-b (fol. 5v col. 2 ll. 9-23)　κλέπτηϲ ... οὐχ οὕτωϲ ἔλεγεϲ 27. 334c (fol. 5v col. 2 ll. 28-32)　φίλουϲ δὲ ... ὡϲαύτωϲ 28. 334c (fol. 5v col. 2 ll. 34-39)　ἆρ᾽ οὖν οὐκ ... τοὐναντίον 29. 334d (fol. 6r col. 1 ll. 1-2)　ἀλλὰ ... ἀδικεῖν 30. 334d (fol. 6r col. 1 ll. 7-9)　τοὺϲ ἀδικοὺϲ ἄρα ... ὠφελεῖν 31. 335b (fol. 6r col. 1 l. 44 - fol. 6r col. 2 l. 2)　ἔϲτιν ἄρα ... ἀνθρώπων 32. 335b (fol. 6r col. 2 ll. 9-13)　ἆρ᾽ οὖν ...ἀρετήν　33. 335c (fol. 6r col. 2 ll. 13-17)　ἀνθρώπουϲ δὲ ... γίγνεϲθαι 34. 335c (fol. 6r col. 2 ll. 17-19)　ἀλλ᾽ ἡ δικαιοϲύνη ... ἀρετή 35. 335c (fol. 6r col. 2 ll. 19-22)　καὶ τοὺϲ βλαπτομένουϲ ἄρα ...γίγνεϲθαι 36. 335c (fol. 6r col. 2 ll. 22-24)　ἆρ᾽ οὖν ... ποιεῖν 37. 335c (fol. 6r col. 2 ll. 25-26)　ἀλλὰ τῆι ἱππικῆι οἱ ἱππικοι ἀφίπποουϲ 38. 335c-d (fol. 6r col.

2 ll. 27-30) ἀλλὰ τηι δικαιοσύνηι ... κακούσ 39. 335d (fol. 6r col. 2 ll. 30-32) οὐ γὰρ θερμότητοσ ... ἐναντίου 40. 335d (fol. 6r col.2 ll. 32-34) οὐδὲ ξηρότητοσ ... ἐναντίου 41. 335d (fol. 6r col. 2 ll. 34-36) οὐδὲ δὴ τοῦ ἀγαθοῦ ... ἐναντίου 42. 335d (fol. 6r col. 2 ll. 36-37) ὁ δέ γε δίκαιοσ ἀγαθόσ 43. 335d (fol. 6r col. 2 ll. 38-41) οὐκ ἄρα ... τοῦ ἀδίκου 44. 335e (fol. 6v col. 1 ll. 10-15) μαχούμεθα ἄρα ... ἀνδρῶν 45. 336a (fol. 6v col. 1 ll. 17-21) ἀλλ᾽ οἶσθα ...βλάπτειν 46. 337c (fol. 7r col. 1 ll. 41-42) ἄλλο τι οὖν ... ἀποκρινῆι 47. 338d (fol. 7v col. 1 ll. 39-43) εἶτ᾽ οὐκ οἶσθ᾽ ... ἀριστοκρατοῦνται 48. 338d (fol. 7v col. 1 l. 43 - fol. 7v col. 2 l. 1) οὐκοῦν ... τὸ ἄρχον 49. 339b (fol. 7v col. 2 ll. 37-39) οὐ καὶ ... φὴισ εἶναι 50. 339c (fol. 7v col. 2 l. 44 - fol. 8r col. 1 l. 3) οὐκοῦν ... ὀρθῶσ 51. 339c (fol. 8r col. 1 ll. 8-10) ἃ δ᾽ ἂν ... δίκαιον 52. 339d (fol. 8r col. 1 l. 24) ταῦτ᾽ οὐχ ὡμολόγηται 53. 340c (fol. 8r col. 2 l. 36) οὕτω σε φῶμεν λέγειν 54. 340c (fol. 8r col. 2 ll. 37-39) ἀλλά ... με οἴει ...ἐξαμαρτάνηι 55. 341a (fol. 8v col. 1 ll. 37-38) δοκῶ σοι συκοφαντεῖν 56. 341a (fol. 8v col. 1 ll. 38-41) οἴει γάρ με... ὡς ἠρόμην 57. 341d (fol. 8v col. 2 ll. 35-37) οὐκοῦν ... ξυμφέρον 58. 341d (fol. 8v col. 2 ll. 37-40) οὐ καὶ ἡ τέχνη ... ἐκπορίζειν 59. 341d (fol. 8v col. 2 ll. 41-43) ἆρ᾽ οὖν ... εἶναι 60. 342c (fol. 9r col. 1 ll. 41-43) οὐκ ἄρα ... ἀλλὰ σώματι 61. 342c-d (fol. 9r col. 2 ll. 9-14) οὐκ ἄρα ... ἀλλὰ ...ἑαυτήσ 62. 342d (fol. 9r col. 2 ll. 24-25) ἢ οὐχ ὡμολόγηται 63. 343a (fol. 9v col. 1 l. 5) τιτθή σοί ἐστιν 64. 344e (fol. 10r col. 2 ll. 3-7) ἢ σμικρὸν ... οἴει ... ζωὴν ζῶν 65. 345b (fol. 10r col. 2 ll. 36-39) εἰ γὰρ ... τὸν λόγον 66. 345e (fol. 10v col. 1 ll. 30-33) σὺ δὲ ... οἴει ἄρχειν 67. 346b (fol. 10v col. 2 ll. 22-24) τί δὲ τὴν ...μισθαρνῆι 68. 346d (fol. 11r col. 1 ll. 5-7) ἐὰν δὲ ... τέχνησ 69. 346e (fol. 11r col. 1 ll. 8-10) ἆρ᾽ οὖν ...ἐργάζηται 70. 347b (fol. 11r col. 1 ll. 41-44) ἢ οὐκ οἶσθα ... ἔστιν 71. 348a (fol. 11v col. 1 ll. 12-14) βούλει οὖν ...πείθωμεν, ... λέγει 72. 348b (fol. 11v col. 1 ll. 33-36) τὴν τελέαν ...φὴισ εἶναι 73. 348c (fol. 11v col. 1 ll. 39-41) τὸ μέν που ἀρετὴν ... καλεῖσ ... κακίαν 74. 348c (fol. 11v col. 1 ll. 41-43) οὐκοῦν ...κακίαν 75. 348d (fol. 11v col. 2 ll. 5-6) τὴν ἀδικίαν ἄρα ... καλεῖσ 76. 348d (fol. 11v col. 2 ll. 7-10) ἦ καὶ ... σοι ...δοκοῦσιν ... ἄδικοι 77. 348d (fol. 11v col. 2 ll. 13-15) σὺ δὲ οἴει με ...λέγειν 78. 349b (fol. 12r col. 1 ll. 7-10) ἀλλὰ ... πειρῶ ... ἀποκρίνασθαι ὁ δίκαιοσ ... ἔχειν 79. 349 b (fol. 12r col. 1 l. 13) τί δὲ τὴσ ... πράξεωσ 80. 349c (fol. 12r col. 1 ll. 24-26) ἆρα ... πράξεωσ 81. 349d-e (fol. 12r col. 2 ll. 6-7) μουσικὸν ... λέγεισ ... ἄμουσον 82. 349e (fol. 12r col. 2 ll. 7-9) πότερον ... ἄφρονα 83. 349e (fol. 12r col. 2 l. 14) οὐχ οὕτωσ 84. 349e (fol. 12r col. 2 ll. 14-20) δοκεῖ ... σοι ... ἔχειν 85. 349e (fol. 12r col. 2 l. 21) τί δὲ ἀμούσου 86. 350a (fol. 12r col. 2 ll. 22-25) τί δὲ ἰατρικόσ ... πράγματοσ 87. 350a (fol. 12r col. 2 ll. 25-26) μὴ ἰατρικοῦ δέ 88. 350a (fol. 12r col. 2 ll. 26-33) περὶ πάσησ δὲ ὅρα ... εἰ ...πρᾶξιν 89. 350a-b (fol. 12r col. 2 ll. 35-38) τί δὲ ὁ ἀνεπιστήμων· οὐχὶ ...ἀνεπιστήμονοσ 90. 350b (fol. 12r col. 2 l. 39) ὁ δὲ ἐπιστήμων σοφόσ 91. 350b (fol. 12r col. 2 l. 40) ὁ δὲ σοφὸς ἀγαθόσ 92. 350b (fol. 12r col. 2 ll. 41-44) ὁ ἄρα ἀγαθόσ ... ἐναντίου 93. 350b (fol. 12v col. 1 ll. 1-2) ὁ δὲ κακόσ ... ἐναντίου 94. 350b (fol. 12v col. 1 ll. 3-6) οὐκοῦν ... ἢ οὐχ οὕτωσ ἔλεγεσ 95. 350d (fol. 12v col. 1 ll. 36-37) ἢ οὐ μέμνησαι, ὦ θρασύμαχε 96. 351b (fol. 12v col. 2 ll. 25-31) πόλιν φαίησ ἃ ... δουλωσαμένην 97. 351c (fol. 13r col. 1 ll. 6-11) δοκεῖσ ... ἀλλήλουσ 98. 351d (fol. 13r col. 1 ll. 11-12) τί δ᾽ εἰ μὴ ἀδικοῖεν, οὐ μᾶλλον 99. 351d (fol. 13r col. 1 l. 17) ἦ γάρ 100. 351d-e (fol. 13r col. 1 ll. 20-26) ἆρα ... πράττειν 101. 351e (fol. 13r col. 1 ll. 27-30) τί

δὲ ἂν ἐν δυοῖν ... τοῖς δικαίοισ 102. 351e-352a (fol. 13r col. 1 ll. 35-44) οὐκοῦν ... δικαίωι・ οὐχ οὕτωσ 103. 352a (fol. 13r col. 2 l. 8) ἦ γάρ 104. 352a (fol. 13r col. 2 ll. 9-10) δίκαιοι δὲ γ᾽ εἰσίν ... θεοί 105. 352d (fol. 13v col. 1 ll. 10-11) δοκεῖ τί σοι ... ἔργον 106. 352e (fol. 13v col. 1 ll. 11-15) ἆρ᾽ οὖν ...ἂν θείησ... ἄριστα 107. 352e (fol. 13v col. 1 ll. 16-17) ἔσθ᾽ ὅτωι ... ὀφθαλμοῖσ 108. 352e (fol. 13v col. 1 ll. 17-18) τί δὲ ἀκούσαισ ... ὦσιν 109. 352e (fol. 13v col. 1 ll. 19-21) οὐκοῦν ... ἂν ... φαμὲν ...εἶναι 110. 353a (fol. 13v col. 1 ll. 21-24) τί δὲ μαχαίραι ... πολλοῖσ 111. 353a (fol. 13v col. 1 ll. 27-28) ἆρ᾽ οὖν ... θήσομεν 112. 353b (fol. 13v col. 1 ll. 41-42) ὀφθαλμῶν φαμὲν ... ἔργον 113. 353b (fol. 13v col. 1 ll. 43-44) ἆρ᾽ οὖν ...ἔστιν 114. 353b (fol. 13v col. 1 l. 44) τί δὲ, ὤτων ἦν τι ἔργον 115. 353b (fol. 13v col. 2 l. 1) οὐκοῦν καὶ ἀρετή 116. 353b (fol. 13v col. 2 ll. 2-3) τί δὲ πάντων περὶ τῶν ἄλλων, οὐχ οὕτω 117. 353b-c (fol. 13v col. 2 ll. 4-8) ἆρ᾽ ἄν ... κακίαν 118. 353d (fol. 13v col. 2 ll. 20-21) τίθεμεν ... λόγον 119. 353d (fol. 13v col. 2 ll. 23-31) ψυχῆσ ... εἶναι 120. 353d (fol. 13v col. 2 ll. 31-33) τί δ᾽ αὖ τὸ ζῆν, ψυχῆσ φήσομεν ... εἶναι 121. 353d (fol. 13v col. 2 ll. 33-35) οὐκοῦν ... φαμέν ... εἶναι

2.2 台詞の中間にある文末

『クレイトポン』1. 408d-e (fol. 1v col.2 ll. 25-31) πῶσ ποτε ... τελέωσ 2. 409b (fol. 2r col. 1 ll. 27-28) ἰατρική που τίσ λέγεται τέχνη 『国家』第 1 巻 3. 328a (fol. 3r col. 2 ll. 1-2) ἀφ᾽ ἵππων ἦν δ᾽ ἐγώ 4. 329c (fol. 3v col. 2 ll. 16-17) ἔτι ... συγγίγνεσθαι 5. 337b (fol. 7r col. 1 ll. 29-30) πότερον ... μηδ᾽ εἰ ... τυγχάνει ὄν 6. 339c (fol. 8r col. 1 ll. 6-7) τὸ δὲ μὴ ὀρθῶσ ἀξύμφορα 7. 339d (fol. 8r col. 1 ll. 17-21) οὐχ ὡμολόγηται ... βελτίστου 8. 339e (fol. 8r col. 1 ll. 25-37) οἷου ... λέγεισ 9. 340c (fol. 8r col. 2 ll. 31-35) ὦ θρασύμαχε ...ἐάντε μή 10. 340d (fol. 8v col. 1 ll. 1-8) ἐπεὶ ... ἁμαρτίαν 11. 342a (fol. 9r col. 1 ll. 20-25) ἄρα ... τοιαύτησ 12. 343c (fol. 9v col. 1 ll. 28-31) καὶ οὕτω πόρρω εἶ ... ἀδικίασ 13. 345e (fol. 10v col. 1 ll. 35-38) τὰς ἄλλας ... αἰτοῦσιν 14. 346a (fol. 10v col. 1 ll. 41-44) οὐχὶ... φαμὲν ...ἔχειν 15. 346b (fol. 10v col. 2 ll. 10-12) αὐτὴ γὰρ ...δύναμισ・ ἢ ... καλεῖσ 16. 347a (fol. 11r col. 1 ll.38-39) τὸν τῶν βελτίστων ἄρα ... οὐ ξυνιεῖσ 17. 347a (fol. 11r col. 1 ll.40-41) δι᾽ ὅν ... ἄρχειν 18. 353b (fol. 13v col. 1 ll. 37-40) οὐκοῦν ...δοκεῖ σοι ... προστέτακται

3 「疑問符」の形態

写本Ａそのものの諸形態、諸特徴は、Jowett (Jowett & Campbell, Ⅱ xxvii-xxix)、Campbell (*op.cit.*70-72)、Boter (45-48; 80-91) に詳しい。しかしながら、先行のこれらの報告では、「疑問符」の形態については、「：」に「,」が下についた印という報告に留まる。Allen には言及さえない。本項では、元からあった話者交代を示す記号「：」と、新たに加わった「,」との関係を明らかにする。事例に関しては文末の 1 語を示す。

3.1 一台詞の中間にある文末に現れる「；」の形態

3.1.1 垂直方向に一列に並ぶ場合

一台詞の最後に表れる場合と異なり、文字の形態に関係なく、上の丸と下の「,」が一列に並ぶ。丸の幅と、下の「,」の幅はほぼ同じ。

『国家』第 1 巻 1. 337b (fol. 7^{r} col. 1 l. 30) ὄν 2. 340 d (fol. 8^{v} col. 1 l. 8) ἁμαρτίαν 3. 345e (fol. 10^{v} col. 1 l. 38) αἰτοῦσιν 4. 346a (fol. 10^{v} col. 1 l. 44) ἔχειν 5. 328a (fol. 3^{r} col. 2 l. 2) ἐγώ 丸の方が幅広 6. 339d (fol. 8^{r} col. 1 l. 24) ὡμολόγηται 7. 339c (fol. 8^{r} col. 1 l. 7) ἀξύμφορα 丸の方が幅広 8. 340 c (fol. 8^{r} col. 2 l. 35) μή (文字 η は h 形)　丸の方が幅広 9. 339e (fol. 8^{r} col. 1 l. 37) λέγεισ 丸と「,」は後からスペースのないところに書き込まれている 10. 346b (fol. 10^{v} col. 2 l. 12) καλεῖσ

3.1.2 垂直方向に一列に並ぶが、下の「,」は左斜め下方向に突き刺さる楔の形をして、上の丸とは幅が異なる場合

『国家』第 1 巻 1. 329 c (fol. 3^{v} col. 2 l. 17) συγγίγνεσθαι 2. 353b (fol. 13^{v} col. 1 l. 40) προστέτακται

3.1.3 垂直方向に一列に並んでいない場合

3.1.3.1 文字 ν で終わる語の場合

ν は μ の形をしており、曲がった棒の形をした「,」が μ 形の右下部の曲線に沿って配置され、丸は右にずれて配置されている。筆記具の使い方が、棒形を描く最初の入りの場合と、丸を書く場合とでは、異なっている。

『国家』第 1 巻 1. 347b (fol. 11^{r} col. 1 l. 40)　ἄρχειν

3.1.3.2 文字 η で終わる語の場合

h 形をした文字 η の曲線の終端部の先に同じ幅で「,」があり、その右斜め上に小さな丸が配置されている。

『クレイトポン』1. 409b (fol. 2^{r} col. 1 l. 28) τέχνη

3.1.3.3 文字 σ で終わる語の場合

語末の σ も形は、 ς ではなく σ の形をしている。「,」は σ の水平方向の横棒部分の終端の下にある。この横棒の終端はしばしば、インク溜りのようになっており、その溜りは、下方に偏る、滴るような丸形となっている。「,」は、 σ の終端部と同じ幅で、左斜め下に突き刺さる楔形、または、下に凸の曲がった棒形を形成している。「,」とひと組の丸は σ の横棒の指す水平方向の先に配置されている。

『国家』第 1 巻 1. 328a (fol. 3^{r} col. 2 l. 5) ἵπποισ 2. 347a (fol. 11^{r} col. 1 l. 40) ξυνιεῖσ 3. 342a (fol. 9^{r} col. 1 l. 25) τοιαύτησ 4. 343c (fol. 9^{v} col. 1 l. 35) ἀδικίασ

Plate 1. 3.1.3.3.2 347a (fol. 11r col. 1 l. 40)

οὐ ξυνιεῖσ,·

3.2 一台詞の終わりの文末に表れる「：」の下方に「,」が配置された符号の形態

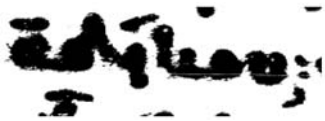
3.2.1 基準線上で文字の右下が下に凸の曲線となっている文字 ν, ρ, ο, υ, ω, α で終わる語の場合

文字 ν は μ 形をしている。文字 α は、丸い部分の右に縦棒が続けて書かれる形をしている。この縦棒は、上から下に降りてから、さらに下に凸の曲線を描いて、丸部分の上の高さまで上がる。ν, ρ, ο, υ, ω, α の文字で語が終わると、これらの文字の右下部の、下に凸の曲線下に、曲線に沿ってスペースができる。

3.2.1.1 「：」の下に、ほぼ縦一列に「,」が配置される場合。

『国家』第 1 巻 1. 327c (fol. 3r col. 1 l. 34) ἐσμέν 2. 344 e (fol. 10r col. 2 l. 7) ζών 3. 332a (fol. 4v col. 2 l. 34) γάρ （「,」の幅は ρ に同じ）4. 351d (fol. 13r col. 1 l. 17) γάρ (「,」は少し文字よりの楔形) 5. 352a (fol. 13r col. 2 l. 8) γάρ (「,」は少し文字よりの楔形) 6. 335d (fol. 6r col. 2 l. 41) ἀδίκου

Plate 2. 3.2.1.1.6 335d (fol. 6r col. 2 l. 41)



ἀδίκου, :

3.2.1.2 「,」は、最後の文字の右下部の、下に凸の曲線に沿って、文字の幅と同じ入りで書かれる。

形状は、左下斜めに突き刺さる楔形、曲がった棒の形、または、ひねりが加わり先が細くなる comma 形のほぼ３様がある。「：」は、最後の文字の幅より小さい幅で、語と語との間の、広いスペースの中間に配置されている。

3.2.1.2.1 楔形

『国家』第 1 巻 1. 332b (fol. 5r col. 1 l. 8) σιμωνίδην 2. 332b (fol. 5r col. 1 l. 11) ὀφειλόμενον 3. 333a (fol. 5r col. 2 l. 20) κτῆσιν 4. 333a (fol. 5r col. 2, l. 23) κτῆσιν ややひねりが加わる 5. 333c (fol. 5v col. 1 l. 9) ἄλλων 6. 334c (fol. 5v col. 2 l. 39) τοὐναντίον ややひねりが加わる 7. 334d (fol. 6r col. 1 l. 9) ὠφελεῖν 入りの部分は丸い 8. 335b (fol. 6r col. 2 l. 2) ἀνθρώπων 9. 335b (fol. 6r col. 2 l. 13) ἀρετήν ややひねりが加わる 10. 335c (fol. 6r col. 2 l. 24) ποιεῖν 11. 335e (fol. 6v col. 1 l. 15) ἀνδρῶν 12. 336a (fol.

6^{v} col. 1 l. 21) βλάπτειν 13. 339c (fol. 8^{r} col. 1 l. 10) δίκαιον 14. 340c (fol. 8^{r} col. 2 l. 36) λέγειν 15. 341a (fol. 8^{v} col. 1 l. 38) συκοφαντεῖν 幅は「：」と同じ 16. 341a (fol. 8^{v} col. 1 l. 41) ἠρόμην 幅は「：」と同じ 17. 341d (fol. 8^{v} col. 2 l. 40) ἐκπορίζειν 18. 343a (fol. 9^{v} col. 1 l. 5) ἐστιν 19. 348c (fol. 11^{v} col. 1 l. 41) κακίαν 幅は「：」と同じ 20. 348c (fol. 11^{v} col. 1 l. 43) κακίαν 21. 348d (fol. 11^{v} col. 2 l. 15) λέγειν 22. 349b (fol. 12^{r} col. 1 l. 10) ἔχειν 23. 349e (fol. 12^{r} col. 2 l. 7) ἄμουσον 24. 349e (fol. 12^{r} col. 2 l. 20) ἔχειν 25. 350a (fol. 12^{r} col. 2 l. 33) πρᾶξιν 26. 351d (fol. 13^{r} col. 1 l. 12) μᾶλλον 27. 351e (fol. 13^{r} col. 1 l. 26) πράττειν ややひねりが加わる 28. 352e (fol. 13^{v} col. 1 l. 18) ὦσιν 29. 353a (fol. 13^{v} col. 1 l. 28) θήσομεν 30. 353b (fol. 13^{v} col. 1 l. 44) ἔργον ややひねりが加わる 31. 353c (fol. 13^{v} col. 2 l. 8) κακίαν 32 .353d (fol. 13^{v} col. 2 l. 21) λόγον 33. 332d (fol. 5^{r} col. 1 l. 36) καλοῖτο ややひねりが加わる 34. 333b (fol. 5^{r} col. 2 l. 37) οἰκοδομικοῦ 35. 335d (fol. 6^{r} col. 2 l. 32) ἐναντίου 36. 335d (fol. 6^{r} col.2 l. 34) ἐναντίου 37. 349e (fol. 12^{r} col. 2 l. 21) ἀμούσου 38. 353b (fol. 13^{v} col. 2 l. 3) οὕτω 39. 352e (fol. 13^{v} col. 1 l. 15) ἄριστα

Plate 4 3.2.1.2.1.10 335c (fol. 6^{r} col. 2 l. 24)

ποιεῖν,:

3.2.1.2.2 曲がった棒の形

『国家』第 1 巻 1. 341d (fol. 8^{v} col. 2 l. 37) ξυμφέρον 2. 345b (fol. 10^{r} col. 2 l. 39) λόγον 3. 345e (fol. 10^{v} col. 1 l. 33) ἄρχειν 4. 347b (fol. 11^{r} col. 1 l. 44) ἔστιν 幅は「：」と同じ 5. 352d (fol. 13^{v} col. 1 l. 11) ἔργον 6. 353b (fol. 13^{v} col. 1 l. 43) ἔστιν 7. 335d (fol. 6^{r} col. 2 l. 36) ἐναντίου 8. 350b (fol. 12r col. 2 l. 44) ἐναντίου 9. 350b (fol. 12^{v} col. 1 l. 2) ἐναντίου 薄いがはっきり見える

Plate 5 3.2.1.2.2.8 350b (fol. 12^{r} col. 2 l. 44)

ουτὲ καὶ ἐναντίου ,:

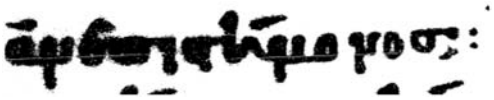
3.2.1.2.3 comma 形

『国家』第 1 巻 1. 334d (fol. 6^{r} col. 1 l. 2) ἀδικεῖν 2. 338 d (fol. 7^{v} col. 2 l. 1) ἄρχον 3. 351b (fol. 12^{v} col. 2 l. 31) δουλωσαμένην 4. 353b (fol. 13^{v} col. 1 l. 42) ἔργον 5. 349e (fol. 12^{r} col. 2 l. 9) ἄφρονα

3.2.2 中段の高さで右水平方向に線が突き出て終わる形状の文字、文字 σ,ε や繋ぎ文字 εσ で終わる語の場合

右水平方向の横棒の終端にインク溜りができ、その下に空間がある。これらの文字の場合、文中の区切り記号の多くの場合同様、記号「,」は、「：」の下にではなく、この横棒終端の下にある。形は、先と同様およそ 3 種類がある。なお、調べた範囲内では、「：」の真下に「,」が配置される場合はない。

Plate 6. 3.2.2.1.8 350b (fol. 12r col. 2 l. 38)



ἀνεπιστήμονοσ,：

3.2.2.1 楔形

『国家』第 1 巻 1. 331d (fol. 4v col. 2 l. 14) κληρονόμοσ 2. 332e (fol. 5r col. 2 l. 16) ἄχρηστοσ 3. 335d (fol. 6r col. 2 l. 30) κακούσ 4. 348d (fol. 11v col. 2 l. 6) καλεῖσ 5. 349b (fol. 12r col. 1 l. 13) πράξεωσ 6. 349c (fol. 12r col. 1 l. 26) πράξεωσ 7. 349e (fol. 12r col. 2 l. 14) οὕτωσ 8. 350b (fol. 12r col. 2 l. 38) ἀνεπιστημόνοσ 9. 350b (fol. 12r col. 2 l. 39) σοφόσ 10. 350b (fol. 12r col. 2 l. 40) ἀγαθόσ 11. 351e (fol. 13r col. 1 l. 30) δικαίοισ 12. 352e (fol. 13v col. 1 l. 17) ὀφθαλμοῖσ 13. 353a (fol. 13v col. 1 l. 24) πολλοῖσ 14. 350a4 (fol. 12r col. 2 l. 26) δέ 15. 350d (fol. 12v col. 1 l. 37) θρασύμαχε

3.2.2.2 曲がった棒の形

『国家』第 1 巻 1. 327c (fol. 3r col. 1 l. 40) ἀκούονταασ 2. 334a (fol. 5v col. 2 l. 3) πράξεισ 3. 334a (fol. 5v col. 2 l. 5) δεινόσ (σ の水平の線の終端からさらに下向きの突起が伸び「,」とつながって見える) 4. 335c (fol. 6r col. 2 l. 26) ἀφίπποσ 5. 335d (fol. 6r col. 2 l. 37) ἀγαθόσ 6. 342d (fol. 9r col. 2 l. 14) ἑαυτής 7. 334b (fol. 5v col. 2 l. 23) ἔλεγεσ （εσ は繋ぎ文字）8. 350b (fol. 12v col. 1 l. 6) ἔλεγεσ（εσ は繋ぎ文字）薄いが見える。近くの 3.2.1.2.9 と薄さは同じ

Plate 7. 3.2.2.2.3 334a (fol. 5v col. 2 l. 5)

καὶ φὼρ δεινόσ, [：]

3.2.2.3 comma 形

『国家』第 1 巻 1. 332e (fol. 5r col. 2 l. 12) ἄχρηστοσ 2. 332e (fol. 5r col.2 l. 14) κυβερνήτησ 3. 339c (fol. 8r col. 1 l. 3) ὀρθῶσ 4. 346d (fol. 11rcol. 1 l. 7) τέχνησ 5. 350a (fol. 12r col. 2 l. 25) πράγματοσ 6. 351c (fol. 13r col. 1 l. 11) ἀλλήλουσ 7. 352a (fol. 13r col. 1 l. 44) οὕτωσ

3.2.2.4 そのほか

1. 334c (fol. 5^{v} col. 2 l. 32) ὡσαύτωσ　滴形。薄い汚損部分にある。薄いが見える。

3.2.3 最下段まで垂直に縦棒が延びる形状の文字、文字 ι や繋ぎ文字 ει で終わる語の場合

文字の右に縦に垂直方向に空間ができる。文字の下には空間がない。

3.2.3.1 「：」の下に、ほぼ縦一列に「,」が配置される場合　記号の幅はほとんど変わらない

『国家』第 1 巻 1. 333e　(fol. 5^{v} col. 1 l. 42) ἐμποιῆσαι 薄 い が 見 え る 2. 335c (fol. 6^{r} col. 2 l. 22) γίγνεσθαι 3. 346c (fol. 10^{v} col. 2 l. 24) μισθαρνῆι 4. 346e (fol. 11^{r} col. 1 l. 10) ἐργάζηται 5. 348b (fol. 11^{v} col. 1 l. 36) εἶναι 6. 348d (fol. 11^{v} col. 2 l. 10) ἄδικοι 7. 353d (fol. 13^{v} col. 2 l. 31) εἶναι 8. 348a (fol. 11^{v} col. 1 l. 14) λέγει（ει は繋ぎ文字）

Plate 8.　3.2.3.1.2　335c (fol. 6^{r} col. 2 l. 22)

γίγνεσθαι, ：

3.2.3.2 「：」の下に、縦一列に「,」が配置される場合。記号の幅が、「,」が「：」に比べ太く、文字 ι の幅と同じ場合。「,」は楔形。

『国家』第 1 巻 1. 328a (fol. 3^{r} col. 2 l. 1) θεῶι 2. 332c (fol. 5^{r} col. 1 l. 33) καλεῖται 3. 335c (fol. 6^{r} col. 2 l. 17) γίγνεσθαι 4. 338d (fol. 7^{v} col. 1 l. 43) ἀριστοκρατοῦνται 5. 339 b (fol. 7^{v} col. 2 l. 39) εἶναι (「,」の幅は、「：」より太く、文字 ι の末端のインク溜りに近い。楔形に近い。) 6. 340c (fol. 8^{r} col. 2 l. 39) ἐξαμαρτάνηι 7. 342d (fol. 9^{r} col. 2 l. 25) ὡμολόγηται 8. 352a (fol. 13^{r} col. 2 l. 10) θεοί 9. 353d (fol. 13^{v} col. 2 l. 33) εἶναι 10. 353d (fol. 13^{v} col. 2 l. 35) εἶναι

3.2.3.3 「,」が「：」の下ではなく、文字 ι よりに付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 333e (fol. 5^{v} col. 1 l. 39) φυλάξασθαι （楔型、ι の終端の撥ねが楔の幅広の始点に向っている）2. 339 d (fol. 8^{r} col. 1 l. 24) ὡμολόγηται 3. 341d (fol. 8^{v} col. 2 l. 43) εἶναι 4. 342c (fol. 9^{r} col. 1 l. 43) σώματι 5. 352e (fol. 13^{v} col. 1 l. 21) εἶναι 楔形　「：」より「,」は細く薄い

3.2.3.4 「,」が「：」の下ではなく、文字 ι からの筆記具の運びで書かれている場合

『国家』第 1 巻 1. 332a (fol. 4^{v} col. 2 l. 37) ἀπαιτοῖ（「,」は楔形で、文字 ι に寄ったところに付されており、幅が「：」とは異なり ι と同じで、ι の末端の上向きの撥ねからかすれた痕跡が「,」につながって見える。）（下記 Plate 12 参照）

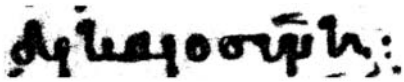
3.2.4 基準線上、右斜め下方に向って終わるｈ形の文字 η で終わる語の場合

3.2.4.1 ｈ形の終端が波形を描き右斜め下に向うその延長から、「,」が付される場合

「,」は、楔形または comma 形に、「：」より幅が広く文字 η の幅と同じ幅で、付されている。「：」は語と語との間に作られたスペースの真ん中に配置されている。

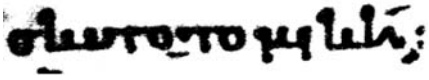
『国家』第 1 巻 1. δικαιοσύνη（comma 形）2. 333a (fol. 5^{r} col. 2 l. 21) σκυτοτομική （楔形）。幅は「：」より太く、η と同じ）3. 333d (fol. 5^{v} col. 1 l. 20) ἀμπελουργική（comma 形）4. 353b (fol. 13^{v} col. 2 l. 1) ἀρετή （comma 形）

Plate 9. 3.2.4.1.1 332e (fol. 5^{r} col. 2 l. 18)



δικαιοσύνη,:

Plate 10. 3.2.4.1.2 333a (fol. 5^{r} col. 2 l. 21)



σκυτοτομική,:

Plate 11. 3.2.4.1.4 353b (fol. 13^{v} col. 2 l. 1)

最後の文字の終端と「,」の入りとの間で、かすかにインク間の連続が映る

ἀρετή,:

3.2.4.2 ｈ形の波線の延長に切れることなく「,」が続く場合

『国家』第 1 巻 1. 335c (fol. 6^{r} col. 2 l. 19) ἀρετή（下記 Plate 13 参照）

4 「疑問符」の形成に関する新仮説

話者交代の記号「：」が、古代パピルス文書に表れていることを考えると、台詞末文末に「：」に「,」を合わせて「疑問符」を形成することは、「：」の形成より歴史的に後から生じたことである。9 世紀ギリシア語の書写が、右から左へ、上から下へと文字が書き進められる習慣から考えれば、「,」は、「：」の下方に配置されているのならば、写字生は「：」を付してから、「,」を付したと考えるのが常識である。また、先に述べたように、句読法は、多くの写本で、本文とは別の手によって後か

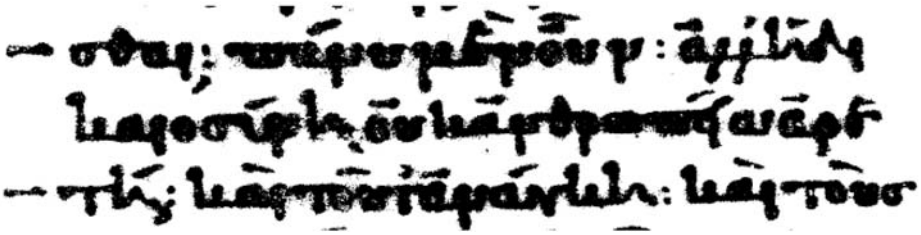
ら書き加えられていることが観察される。これらのことから、写本 A においても、同一の手であれ、別の手であれ、「：」が付された後に、「,」が付されたと想定するのは自然である。実際、一見すると、「：」と「,」とでは、多くの場合筆記具の使い様が、上の報告でも明らかなように、違うものと印象付けられる。また形態もさまざまである。更に、「,」の配置を考えても、B 写本『ゴルギアス』冒頭部にみられるように、「：」と「,」とが一体感をもって付されたとは、とても思えない。きれいに語と語との間を空けて配置された話者交代の記号「：」の按配とは、別の気遣いで、空いているスペースに、「：」とは異なる筆記具の使い様で、後から付け加えられたものと映る。実際、パリの図書館で現物を直接見た Campbell によって、アクセント記号の、「ほとんどではないにせよ、多く」が、Cobet の観察による裏づけとともに、別のインクで付されていると報告されている (Jowett & Campbell, Ⅱ 71)。上記報告例の中でも、「：」の濃さに比べて薄いために複写しても映らない例があるが、これはインクの違いによるかもしれない（3.2.1.2.2.9; 3.2.2.2.8; 3.2.2.4.1; 3.2.3.1.1; 3.2.3.3.5）。また、近年『国家』篇の写本の問題を周到に検討した Boter によっても、括弧付きではあるが “(in all probability by a later hand)”「十中八九、後代の手で」、問題の疑問符は付加されたものだと断定されている。

こうした時間をかけて現物を直接、念入りに研究した専門家の証言を、短時日の白黒マイクロフィルムの観察から否定するのは、大きな錯誤か何か大きな見落としをしているのではないかと恐れるが、なお、光学的にネガ・ポジを逆転することによる電子コピーでは以下のように写る。

Plate 12. 3.2.3.4.1: 332a (fol. 4^{v} col. 2 l. 37) ἀπαιτοῖ

— ἀπαιτοῖ. : ἀληθῆ, ...

Plate 13. 3.2.4.2.1: 335c (fol. 6^{r} col. 2 ll. 18-19) ... ἀρε ／ τή. : ...



— σθαι. : πάνυ μὲν οὖν : ἀλλ᾽ ἡ δι

καιοσύνη. οὐκ ἀνθρωπεία ἀρε

— τή. : καὶ τοῦτ᾽ ἀνάγκη : καὶ τοὺσ

これらの白黒の図柄は、光学上の器械処理によって起こった偶然かもしれない。「,」を無理やり書き込んだら繋がって見えるようになってしまったと考えることも十分可能である。直接目で見れば、

インクが現に異なっているかもしれない。しかし、もしそうしたことがなければ、上記 2 例は、「疑問符」形成上、「,」は「：」の後から付されたのではなく、「：」より先に付したということを示していると言わざるを得ない。この 2 例を、偶然ではないと考えるならば、従来、原文再構成上価値のないものと素通りしがちであった、「疑問符」を構成する「,」の形成についてどのようなことを想定することができるであろうか。改めて、本稿の 3.2.2.1-3、3.2.3.3、3.2.4.1 の諸例が示すことはどういうことであろうか。

まず、「：」に組み合わせた「,」の一部については、写字生が、「,」の直前の最後の文字を写した際の筆記具の運びのまま、休まず、「,」を付したということを示していることになろう。これはまた、この写字生が、文字 σ, ε, 繋ぎ文字 εσ らの後に、文中の区切り記号を、文字を書いた運びで直下に付す、この写本に見られる習慣と一致していると考えられる。従って、「：」から「,」へと考えてしまうわれわれの常識に反して、今回の調査の範囲内では、写字生が、疑問符のかなりの部分で、「,」から「：」へと、筆記具を運んだと仮定すべきである。

それでは、この書写行為の意味するところは何であろうか。あるときは「,」から「：」へ、あるときは「：」から「,」へと、筆記具を運んだだけで、ただ原本にある未発達の疑問符をそのまま写しただけのことで、写字生は何も考えていなかった、そういうことかもしれない。しかし、もし、もともときれいに「：」と「,」は縦一列に並んで一体化していたならば、これを、わざわざ、粗雑に配置換えしたであろうか。「,」は、先の写本Ｂの一部に見られる様に、「：」の右に、配置されていることはない。従って、「粗雑」というより、寧ろ「規則的」というべきであろう。そうだとすれば、もし、考えずに、原本をそっくりに写したと仮定することは、今あるとおりの書写行為の意図が持っている問題を繰り返すことになる。すなわち、いつ、だれが、疑問符を、台詞末ごとに、原本本文を書写する時に、付すべきか否か判断したかという問題は依然残る。もちろん写字生と判断の責任者は同じとは限らない。むしろ、写字生は書写が仕事であるから傍らにいた別人の可能性が高い。

いずれにせよ、本文の書写の際に文末で、何もない「：」に対して何らか特異な文意を巡る解釈上の判断が下された、この可能性は、この写本の特徴からも裏付けられる。単語の分かち書きもなく、句読法もまたない uncial 体から、多くの uncial 体の特徴を残したままで、写すことが行われたという事実は変わらない。本稿では細かく分析しなかったが、写本Ａの写字生は、確かに、単語の分かち書きを、目に見える十分なスペースをとる形では行っていないけれども、しかし、よく調べていくと、意味の繋がりのあるところを除けば、単語と単語とを繋げて書くことを、きわめて注意深く、避けている（Plate 15 参照）。すなわち、語の区切り、よって、意味の区切りを、uncial 体とは異なって明確にしようとしていたと言える。そして、これは、少なくとも「多く」はない箇所で、「異なる」ことのないインクで、アクセント、気息記号を付すことによって行われたと考えられる（4.1.1.1 定型冒頭句 τί δέ 参照）。また、話者の交代に関しては、慎重に十分なスペースをとって、文字とは異なる筆記具の使用で「：」を付した。これらも、原本をそのまま写したのだとすると、問題は原本書写の際の書写行為の意図の問題に遡るだけである。いずれにせよ、この写本の書写行為を遂行するということは、意味を汲み取り、文末、台詞末を意識して、「：」に際して、「,」を先に付して、「疑問符」とされる有意の符号を残したことになる。それは、どこか、この時よりそれほど遡ることのない時点で、

原本の写字生の書写の、あるいは、まさにこの写本の写字生の書写の際に、疑問符の無かった uncial 体の原本から、文意を汲み取って、その特性を示す符号を付すことと同時に、書写が進行したことになる。

もし以上の想定が事実に近かったとすると、この解釈者による、「疑問符」を付す際の判断基準は何であったろうか。次項において、先ず、疑問符が付される文の特性について調査結果を報告する。

5 文法的・意味論的に明示的に疑問文の特徴のある個所における「疑問符」の有無

5.1 疑問詞をともなう文

5.1.1 疑問符が付されている場合。

5.1.1.1 定型冒頭句 τί δέ ... ではじまる文（写本 A では、アクセントが τί δὲ となっており、文が切れずに続く。）

『国 家』第 1 巻 1. 332b (fol. 5[r] col. 1 ll. 9-11) τί δὲ τοῖσ ἐχθροῖσ ... ὀφειλόμενον 2. 345e (fol. 10[v] col. 1 ll. 34-38) τί δὲ, ..., ὦ θρασύμαχε· τὰς ἄλλασ ...αἰτοῦσιν 3. 346b (fol. 10[v] col. 2 ll. 22-24) τί δὲ τὴν ...μισθαρνῆι 4. 349b (fol. 12[r] col. 1 l. 13) τί δὲ τὴσ ... πράξεωσ 5. 349e (fol. 12[r] col. 2 l. 21) τί δὲ ἀμούσου 6. 350a (fol. 12[r] col. 2 ll. 22-25) τί δὲ ἰατρικὸσ ἐν τῆι ἐδωδῆι ...πράγματοσ 7. 350a-b (fol. 12[r] col. 2 ll. 35-38) τί δὲ ὁ ἀνεπιστήμων · οὐχὶ ...ἀνεπιστήμονοσ 8. 352e (fol. 13[v] col. 1 ll. 17-18) τί δὲ ἀκούσαισ ... ὦσιν 9. 353a (fol. 13[v] col. 1 ll. 21-24) τί δὲ μαχαίραι ... πολλοῖσ 10. 353b (fol. 13[v] col. 1 l. 44) τί δὲ, ὥτων ἦν τι ἔργον 11. 353b (fol. 13[v] col. 2 ll. 2-3) τί δὲ πάντων περὶ τῶν ἄλλων, οὐχ οὕτω 12. 353d (fol. 13[v] col. 2 ll. 31-33) τί δ᾽ αὖ το ζῆν, ψυχῆσ φήσομεν ... εἶναι

5.1.1.2 疑問代名詞 τίς、τί をともなう文

『クレイトポン』1. 409b (fol. 2[r] col. 1 ll. 27-28) ἰατρική που τίσ λέγεται τέχνη『国家』第 1 巻 2. 332c (fol. 5[r] col. 1 ll. 30-33) ἡ δὲ τίσιν τί ἀποδιδοῦσα ... καλεῖται 3. 332d (fol. 5[r] col. 1 ll. 34-36) ἡ οὖν δὴ τίσιν τί ἀποδιδοῦσα ... καλοῖτο 4. 333c (fol. 5[v] col. 1 ll. 6-9) ὅταν οὖν τί ..., ... τῶν ἄλλων 5. 345b (fol. 10[r] col. 2 ll. 36-39) εἰ γὰρ ...τί ... ποιήσω· ἢ ... τὸν λόγον

5.1.1.3 疑問副詞 πῶς の場合

『クレイトポン』1. 408d-e (fol. 1[v] col.2 ll. 25-31) πῶσ ποτε ... τελέωσ (nq: edd.)

5.1.1.4 疑問代名詞 πότερος、 πότερον 疑問副詞 ποτέρως の場合

『国家』第 1 巻 1. 334c (fol. 5[v] col. 2 ll. 28-32) φίλουσ δὲ λέγεισ εἶναι πότερον ... ὡσαύτωσ 2. 349e (fol. 12[r] col. 2 ll. 7-9) πότερον ... ἄφρονα 3. 337b-c (fol. 7[r] col. 1 ll. 29-31) πότερον ... μηδ᾽ εἰ ...τυγχάνει ὄν

5.1.2　疑問符が付されていない場合

5.1.2.1 疑問の定型 τί δέ で始まる文

『国家』第 1 巻 1. 332e (fol. 5r col. 2 ll. 5-8) τί δὲ ὁ δίκαιοσ ἐν τίνι πράξει ... βλάπτειν 2. 333a (fol. 5r col. 2 ll. 23-26) τί δὲ δὴ τὴν δικαιοσύνην, ...εἶναι 3. 341c (fol. 8v col. 2 ll. 26-29) τί δὲ κυβερνήτησ・ὁ ὀρθῶς κυβερνήτησ ...ἢ ναύτησ 4. 342a (fol. 9r col. 1 ll. 13-20) τί δὲ δή αὐτὴ ... ἐκποριζούσησ 5. 343a (fol. 9v col. 1 ll. 5-8) τί δὲ ... οὐκ ... ἐρωτᾶν 6. 349c (fol. 12r col. 1 ll. 23-24) τί δὲ δὴ ὁ ἄδικοσ

5.1.2.2 疑問代名詞 τίς, τί をともなう文

『クレイトポン』(409a (fol. 2r col. 1 ll. 14-15) λέγεισ δὲ εἶναί τινασ ταύτασ τὰσ τέχνασ アクセントは τινασ を不定代名詞とする) 1. 409a (fol. 2r col. 1 ll. 17-19) καὶ νῦν δή, τίνα φαμὲν ...τέχνην 2. 409c (fol. 2r col. 1 l. 44) τί τοῦτο φαμὲν εἰπέ『国家』第 1 巻 3. 330d (fol. 4r col. 2 ll. 16-18) τί μέγιστον οἴει ...κεκτῆσθαι 4. 331e (fol. 4v col. 2 ll. 15-19) λέγε δή ... τί φῆισ ...περὶ δικαιοσύνησ 5. 332c (fol. 5r col. 1 l. 22) ἀλλὰ τί οἴει ἔφη 6. 332c (fol. 5r col. 1 ll. 24-27) ὦ σιμωνίδη, ἡ τίσιν οὖν τί ἀποδιδοῦσα ... καλεῖται 7. 332c (fol. 5r col. 1 ll. 27-28) τί ἂν οἴει ἡμῖν αὐτὸν ἀποκρίνασθαι 8. 332d (fol. 5r col. 1 l. 43- fol. 5r col. 2 l. 2) τίς οὖν ... ὑγίειαν 9. 332e (fol. 5r col. 2 ll. 3-4) τίς δὲ ... κίνδυνον 10. 333b (fol. 5r col. 2 ll. 37-41) ἀλλ᾽ εἰσ τίνα ... κιθαριστικοῦ, ὥσπερ...κρουμάτων 11. 336 a (fol. 6v col. 1 l. 21) τίνος 12. 336a (fol. 6v col. 1 ll. 28-31) ἐπειδὴ δὲ ..., τί ... εἶναι 13. 336b-c (fol. 6v col. 2 ll. 1-2) τίς ..., ὦ σώκρατεσ 14. 336c (fol. 6v col. 2 ll. 2-5) καὶ τί αὐτοῖσ 15. 337c (fol. 7r col. 1 ll. 32-33) τί ἂν ... ταῦτα 16. 337d (fol. 7r col. 1 l. 44 - fol. 7r col. 2 l. 4) τί οὖν ἔφη・ἂν δείξω ... τούτων, τί ἀξιοῖσ παθεῖν 17. 337 d (fol. 7r col. 2 ll. 4-6) τί ἄλλο ... εἰδότι 18. 338c (fol. 7v col. 1 ll. 20-21) ἀλλὰ τί οὐκ ἐπαινεῖσ 19. 338c (fol. 7v col. 1 ll. 25-26) καὶ τοῦτο, ὦ θρασύμαχε, τί ποτε λέγεισ 20. 339d (fol. 8r col. 1 ll. 14-15) τί λέγεισ σύ, ἔφη 21. 340a (fol. 8r col. 1 ll. 43-44) καὶ τί ... μάρτυροσ 22. 343a (fol. 9v col. 1 ll. 12-13) ὅτι δὴ τί μάλιστα 23. 348c (fol. 11v col. 2 l. 2) ἀλλὰ τί μήν 24. 349a (fol. 12r col. 1 ll. 4-6) τί δέ σοι ... τοῦτο διαφέρει... ἐλέγχεισ 25. 349d (fol. 12r col. 2 ll. 4-5) ἀλλὰ τί μέλλει 26. 350e (fol. 12v col. 2 ll. 7-8) καίτοι τί ἄλλο βούλει

5.1.2.3 疑問副詞 πῶς の場合

『クレイトポン』1. 407d (fol. 1r col. 2 ll. 35-36) πῶσ ... αἱροῖτ᾽ ἄν 2. 408e (fol. 1v col.2 ll. 39-41) πῶσ ...περὶ μαθήσεωσ・ὥσπερ ... 『国家』第 1 巻 3. 327c (fol. 3r col. 1 l. 34) πῶσ γὰρ οὔ 4. 328a (fol. 3r col. 2 l. 5) ἢ πῶσ λέγεισ 5. 329b-c (fol. 3v col. 2 ll. 15-16) πῶσ ἔφη ... ἔχεισ πρὸσ τἀφροδίσια 6. 334e (fol. 6r col. 1 l. 23) πῶσ θέμενοι, ὦ πολέμαρχε 7. 334e (fol. 6r col. 1 ll. 25-26) νῦν δὲ πῶσ ...μεταθώμεθα 8. 337b (fol. 7r col. 1 ll. 27-29) πῶσ λέγεισ μὴ ἀποκρίνομαι ὧν προεῖπεσ μηδέν 9. 337e (fol. 7r col. 2 ll. 20-27) πῶσ ...φαύλου 10. 338d (fol. 7v col. 1 ll. 43) πῶσ γὰρ οὔ 11. 339c (fol. 8r col. 1 l. 7) ἢ πῶσ λέγεισ 12. 339c (fol. 8r col. 1 l. 10) πῶσ γὰρ οὔ 13. 341e (fol. 8v col. 2 ll. 43-44) πῶσ τοῦτο ἐρωτᾶισ 14. 345b (fol. 10r col. 2 l. 35) καὶ πῶσ, ..., σὲ πείσω 15. 347a (fol. 11r col. 1 ll. 33-34) πῶσ τοῦτο λέγεισ, ὦ

σώκρατεσ 16. 348a (fol. 11^{v} col. 1 ll. 14-15) πῶσ γὰρ οὐ βούλομαι 17. 348c (fol. 11^{v} col. 1 ll. 38-39) φέρε δή, ... πῶσ λέγεισ 18. 348c (fol. 11^{v} col. 1 l. 41) πῶσ γὰρ οὔ 19. 349c (fol. 12^{r} col. 1 ll. 26-27) πῶσ γὰρ οὐκ 20. 349d (fol. 12^{r} col. 1 l. 43 - fol. 12r col. 2 l. 1) πῶσ γὰρ οὐ μέλλει ...ἐοικέναι 21. 351b (fol. 12^{v} col. 2 l. 31) πῶσ γὰρ οὐκ ἔφη 22. 353a (fol. 13^{v} col. 1 l. 23) πῶσ γὰρ οὔ 23. 353c (fol. 13^{v} col. 2 l. 8) καὶ πῶσ ἄν ἔφη 24. 354a (fol. 14^{r} col. 1 l. 8) πῶσ γὰρ οὔ 25. 354a (fol. 14^{r} col. 1 l. 13) πῶσ γὰρ οὔ

5.1.2.4 疑問代名詞 πότερος, πότερον, 疑問副詞 ποτέρως の場合

『国家』第 1 巻 1. 330a (fol. 4^{r} col. 1 ll. 25-28) πότερον ... ἢ ἐπεκτήσω 2. 331c (fol. 4^{v} col. 1 ll. 30-37) τοῦτο δ᾽ αὐτο, ... πότερα ... λάβηι, ἢ ...ποιεῖν 3. 339c (fol. 7^{v} col. 2 ll. 40-43) πότερον ... ἢ ... ἁμαρτεῖν 4. 341c (fol. 8^{v} col. 2 ll. 21-24) ὁ τῶι ἀκριβεῖ ... ἔλεγεσ, πότερον ...ἢ ...θεραπευτήσ 5. 349b (fol. 12^{r} col. 1 ll. 14-17) τοῦ δὲ ἀδίκου πότερον ... δίκαιον 6. 351b (fol. 12^{v} col. 2 ll. 35-40) ἀλλὰ ... σκοπῶ· πότερον ... δικαιοσύνησ

5.1.2.5 そのほか

『クレイトポン』1. 407a (fol. 1^{r} col. 1 ll. 38-39) ποῖ φέρεσθε ὤνθρωποι 『国家』第 1 巻 2. 330b (fol. 4^{r} col. 1 ll. 28-29) ποῖ, ἐπεκτησάμην ἔφη, ὦ σώκρατεσ 3. 344d (fol. 10^{r} col. 1 l. 42 － fol. 10^{r} col. 2 l. 3) ὦ δαιμόνιε θρασύμαχε ... οἷον ... ἔχει 4. 347e (fol. 11^{v} col. 1 ll. 3-6) σὺ οὖν ποτέρωσ ... αἱρῆι· καὶ πότερον ... λέγεσθαι

5.2 疑問の小辞

5.2.1 疑問符が付されている場合

5.2.1.1 疑問の小辞 ἆρα（先行する発言に付言する ἄρα に対して語順から疑問の小辞 ἆρα と取る場合）

『国家』第 1 巻 1. 328a (fol. 3^{r} col. 1 l. 43-fol. 3^{r} col. 2 l. 1) ἆρά γε ... τῆι θεῶι 2. 332e (fol. 5^{r} col. 2 ll. 14-16) ἆρα καὶ τοῖσ μὴ πλεοῦσιν ὁ δίκαιοσ ἄχρηστοσ 3. 339 c (fol. 8^{r} col. 1 ll. 4-7) （Stephanus: ἄρα）τὸ δὲ ὀρθῶσ, ἆρα ... ἀξύμφορα 4. 339e (fol. 8^{r} col. 1 ll. 25-37) οἵου ... προσέταξαν ἆρα ἢ ὃ σὺ λέγεισ 5. 342a (fol. 9^{r} col. 1 ll. 20-25) ἆρα ... τοιαύτησ 6. 349c (fol. 12^{r} col. 1 ll. 24-26) ἆρα ... πράξεωσ 7. 353b-c (fol. 13^{v} col. 2 ll. 4-8) ἆρ᾽ ἄν ... κακίαν

5.2.1.2 疑問の小辞群 ἆρ᾽ οὖν ...

『国家』第 1 巻 1. 333e (fol. 5^{v} col. 1 ll. 35-39) ἆρ᾽ οὐχ ... φυλάξασθαι 2. 333e6 (fol. 5^{v} col. 1 ll. 39-42) ἆρ᾽ οὖν ... ἐμποιῆσαι 3. 334c (fol. 5^{v} col. 2 ll. 34-39) ἆρ᾽ οὖν οὐκ ... τοὐναντίον 4. 335b (fol. 6^{r} col. 2 ll. 9-13) ἆρ᾽ οὖν ...ἀρετήν 5. 335c (fol. 6^{r} col. 2 ll. 22-24) ἆρ᾽ οὖν ... ποιεῖν 6. 341d (fol. 8^{v} col. 2 ll. 41-43) ἆρ᾽ οὖν ...εἶναι 7. 346e (fol. 11^{r} col. 1 ll. 8-10) ἆρ᾽ οὖν ...ἐργάζηται 8. 352e (fol. 13^{v} col. 1 ll. 11-15) ἆρ᾽

οὖν ... ἂν θείησ ... ἄριστα 9. 353a (fol. 13^{v} col. 1 ll. 27-28) ἆρ᾽ οὖν ...θήσομεν 10. 353b (fol. 13^{v} col. 1 ll. 42-43) ἆρ᾽ οὖν ...ἔστιν

5.2.1.3 疑問の小辞 ἦ

強調の小辞 ἦ、または、選言の等位接続詞 ἤ に対して疑問の小辞と取る場合

『国家』第 1 巻 1. 327c (fol. 3^{r} col. 1 ll. 39-40) ἦ ... πεῖσαι μὴ ἀκούονταϲ 2. 348d (fol. 11^{v} col. 2 ll. 7-10) ἦ καὶ ... ϲοι ...δοκοῦϲιν ... ἄδικοι 3. 351d (fol. 13^{r} col. 1 l. 17) ἦ γάρ

5.2.2 疑問符が付されていない場合

5.2.2.1 疑問の小辞 ἆρα

『国家』第 1 巻 1. 335b (fol. 6^{r} col. 2 ll. 7-9) ἆρα ... ἢ ... ἵππων

5.2.2.2 疑問の小辞群 ἆρ᾽ οὖν ...

『国家』第 1 巻 1. 333b (fol. 5^{r} col. 2 ll. 30-33) ἆρ᾽ οὖν ὁ δίκαιοϲ ... θέϲιν ἢ ὁ πεττευτικόϲ 2. 353e (fol. 13^{v} col. 2 ll. 35-39) ἆρ᾽ οὖν ... ἀρετῆϲ ἢ ἄδυνατον

5.2.2.3 疑問の小辞 ἦ

『国家』第 1 巻 1. 333 c (fol. 5^{v} col. 1 l. 3) ἦ γάρ 2. 341e (fol. 9^{r} col. 1 ll. 10-12) ἦ ὀρθῶϲ ϲοι δοκῶ ... ἢ οὔ

5.2.2.4 そのほかの疑問の小辞

『国家』第 1 巻 1. 342d (fol. 9^{r} col. 2 ll. 17-21) ἄλλο τι ... κάμνοντι 2. 351e (fol. 13^{r} col. 1 ll. 31-34) ἐὰν δὲ δή ... ἀδικία, μῶν μὴ ἀπολεῖ ... δύναμιν ἢ οὐδὲν ἧττον ἕξει

5.3 相手に答えることを命令・勧奨する文に続く文

5.3.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 339b (fol. 7^{v} col. 2 ll. 37-39) οὐ καὶ ... φὴιϲ εἶναι 2. 340c (fol. 8^{r} col. 2 ll. 31-35) ὦ θραϲύμαχε, τοῦτο ἦν ...ἐάντε μή 3. 340c (fol. 8^{r} col. 2 l. 36) οὕτω ϲε φῶμεν λέγειν 4. 343a (fol. 9^{v} col. 1 l. 5) τιτθή ϲοί ἐϲτιν 5. 346a (fol. 10^{v} col. 1 ll. 41-44) οὐχὶ... φαμὲν ... ἔχειν 6. 348b (fol. 11^{v} col. 1 ll. 33-36) τὴν τελέαν ... φὴιϲ εἶναι 7. 349b (fol. 12^{r} col. 1 ll. 9-10) ὁ δίκαιοϲ ...ἔχειν 8. 351b (fol. 12^{v} col. 2 ll. 26-31) πόλιν φαίηϲ ἂν ... δουλωϲαμένην 9. 351c (fol. 13^{r} col. 1 ll. 6-11) δοκεῖϲ ... ἀλλήλουϲ 10. 351d-e (fol. 13^{r} col. 1 ll. 20-26) ἆρα ... πράττειν 11. 352d (fol. 13^{v} col. 1 ll. 10-11) δοκεῖ τί ϲοι ... ἔργον

12. 352e (fol. 13^{v} col. 1 ll. 16-17) ἔσθ᾽ ὅτῳ ... ὀφθαλμοῖσ 13. 353d (fol. 13^{v} col. 2 ll. 23-31) ψυχῆσ ... φαῖμεν ... εἶναι

5.3.2　疑問符が付されていない場合

『国家』第 1 巻 1. 331e (fol. 4^{v} col. 2 ll. 15-19) λέγε δή ... τί φὴισ ... δικαιοσύνησ 2. 342b (fol. 9^{r} col. 1 ll. 39-40) οὕτωσ, ἢ ἄλλωσ ἔχει 3. 349c-d (fol. 12^{r} col. 1 ll. 33-36) ὁ δίκαιοσ ... ἀνομοίου (q: Bekker, Burnet, Chambry, Slings; f: c.)

5.4.1 先行する立言または内含する命題と併せて、tautology となる選言命題を形成する文で、続いて、dilemma の角として展開されることのない文

5.4.1.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 342d (fol. 9^{r} col. 2 ll. 24-25) ἢ οὐχ ὡμολόγηται 2. 350b (fol. 12^{v} col. 1 ll. 3-6) οὐκοῦν ... πλεονέκτει· ἢ οὐχ οὕτωσ ἔλεγεσ 3. 350d (fol. 12^{v} col. 1 ll. 36-37) ἢ οὐ μέμνησαι, ὦ θρασύμαχε

5.4.1.2 疑問符が付されていない場合

『国家』第 1 巻 1. 333a (fol. 5^{r} col. 2 l. 19) καὶ γὰρ γεωργία, ἢ οὔ 2. 333a (fol. 5^{r} col. 2 ll. 28-29) ξυμβόλαια δὲ λέγεισ κοινωνήματα ἤ τι ἄλλο 3. 335b (fol. 6^{r} col. 2 ll. 5-7)（相反性質）βλαπτόμενοι ... βελτίουσ ἢ χείρουσ γίγνονται 4. 341e (fol. 9^{r} col. 1 ll. 10-12) ἢ ὀρθῶσ σοι δοκῶ ...ἢ οὔ 5. 342b (fol. 9^{r} col. 1 ll. 39-40) καὶ σκόπει ... οὕτωσ, ἢ ἄλλωσ ἔχει

5.5.1 先行する立言または内含する命題と併せて、矛盾命題を形成する

5.5.1.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 349e (fol. 12^{r} col. 2 l. 14) οὐχ οὕτωσ 2. 351e-352a (fol. 13^{r} col. 1 ll. 35-44) οὐκοῦν ... δικαίωι· οὐχ οὕτωσ

5.6 間接的な方法による疑問

対話相手の命題への関与に言及し、かつ、同時に、関与について断定を控える表現を選択する。

5.6.1 疑問符の付されていない場合

『国家』第 1 巻　1. 334a-b (fol. 5^{v} col. 2 ll. 9-23) ἄρα ..., ὡσ ἔοικεν 動詞 κινδυνεύω の 2 人称単数現在形 κλέπτησ ἄρα..., ὡσ ἔοικεν, ἀναπέφανται (nq:edd.) καὶ κινδυνεύεισ...αὐτό· (nq:edd.) καὶ γὰρ ... ἔοικεν οὖν ... κατά σε καὶ ... ἐχθρῶν 2. 332b-c (fol. 5^{r} col. 1 ll. 15-18) ἠνίξατο ἄρα ... ὡσ ἔοικεν ... ὃ εἴη (f: edd.) 3. 350c (fol. 12^{v} col. 1 ll. 9-13) ἔοικεν ἄρα ... ἀμαθεῖ (f: edd.) 4. 353e (fol. 14^{r} col. 1 ll.

5-6) φαίνεται, ἔφη, κατὰ τὸν σὸν λόγον (f: edd.)

6 文法的・意味論的に明示的には疑問文の特徴をもたない箇所における疑問符の有無

6.1 οὐκοῦν で始まる文

対話相手の、肯定、否定の応答による主張に続いて、まだ相手の関与が表明されていない新たな命題に、または、その対話相手の応答における主張から論理的に帰結する命題に、言及する文。οὐκοῦν で始まる文に内含される命題に対話相手が関与することを、話者が、先取し断定するか、先取断定することを控え相手にその意向を尋ねるか、あるいは、そのいずれか、いかにも相手に分かるようにそうしているふりをするか、これらのうちいずれを選択するかは、対話の場の社会条件、対話者の社会的地位等社会関係に依存する。またその選択された意図が、実現するか否かは、対話相手に依存している。

6.1.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 331d (fol. 4^{v} col. 2 ll. 12-14) οὐκοῦν ... ὁ πολέμαρχοσ, τῶν γε σῶν κληρονόμοσ（q: edd.）2. 338d (fol. 7^{v} col. 1 l. 43 - fol. 7^{v} col. 2 l. 1) οὐκοῦν ... τὸ ἄρχον（q: edd.）3. 339c (fol. 7^{v} col. 2 l. 44 - fol. 8^{r} col. 1 l. 3) οὐκοῦν ... ὀρθῶσ （f: Musurus; q: c.）4. 341d (fol. 8^{v} col. 2 ll. 35-37) οὐκοῦν ... ξυμφέρον （f: Musurus; q: c.）5. 348c (fol. 11^{v} col. 1 ll. 41-43) οὐκοῦν ...κακίαν（q: edd.）6. 353b (fol. 13^{v} col. 1 ll. 37-40) 表明されていない相手の信念・態度・発言に言及する文 οὐκοῦν ... δοκεῖ σοι ... προστέτακται（q: edd.）7. 353b (fol. 13^{v} col. 2 l. 1) 添加の小辞 καί をともなう文 οὐκοῦν καὶ ἀρετή（nq: Musurus; q: c.）8. 353d (fol. 13^{v} col. 2 ll. 33-35) 表明されていない相手の信念・態度・発言に言及する文 οὐκοῦν ... φαμέν ... εἶναι（q: edd.）

6.1.2 疑問符が付されていない場合

『クレイトポン』1.** 407d (fol. 1^{r} col. 2 ll. 37-39) 添加の小辞 καί をともなう文 οὐκοῦν καὶ τοῦτο ... ἑκούσιον（q: edd.）『国家』第 1 巻 2. 327c (fol. 3^{r} col. 1 ll. 36-39) οὐκοῦν ... ὡς χρὴ ἡμᾶσ ἀφεῖναι (q: Ast, Stallbaum, Hermann, Adam, Burnet, Shorey, Chambry, Slings f: Ficinus, Musurus, Stephanus, Bekker, Schneider, Baiter, Jowett & Campbell) 3.** 333c (fol. 5^{v} col. 1 ll. 11-13) οὐκοῦν λέγεισ ...κεῖσθαι（q: edd.）4. 337d (fol. 7^{r} col. 2 ll. 11-12) οὐκοῦν ἐπειδάν μοι γένηται, εἶπον (Musurus: comma; f: c.) 5.** 342d (fol. 9^{r} col. 2 ll. 25-27) 添加の小辞 καί、ならびに、二つの主張間の対比を示す相関句 ἀλλὰ οὐ ... をともなう文 οὐκοῦν καὶ ὁ κυβερνήτησ ... ἀλλ᾽ οὐ ναύτησ（q: edd.）6. 342e (fol. 9^{r} col. 2 ll. 33-43) 二つの主張間の対比を示す相関句 οὐ ... ἀλλά ... をともなう文 οὐκοῦν... οὐδὲ ἄλλοσ οὐδεὶσ ..., ἀλλὰ ... ἅπαντα (f: edd.) 7.** 346a (fol. 10^{v} col. 2 ll. 3-8) οὐκοῦν ... οὕτω (f: Musurus, Stephanus; q: c. (οὕτωσ Bekker, Ast, Stallbaum, Baiter, Shorey)) 8.** 346a (fol. 10^{v} col. 2 ll. 8-9) οὐκοῦν ... μισθόν（f: Musurus; q: c.）9.** 346c (fol. 10^{v} col. 2 ll. 24-27) 先行する相手の発言に言及する文 οὐκοῦν ... ὡμολογήσαμεν εἶναι（f: Musurus; q: c.）10. 346e (fol. 11^{r} col. 1 ll. 10-18) οὐκοῦν ... τοῦτο ἤδη δῆλον, ὅτι ...κρείττονοσ

（f: edd.）11.** 349c (fol. 12r col. 1 ll. 28-32) οὐκοῦν ... λαβῆι（f: Musurus; q: c.）12.** 349d (fol. 12r col. 1 ll. 40-43) οὐκοῦν ... ἔοικεν (f: Ficinus, Musurus, Stephanus; q. c.) 13.** 349e (fol. 12r col. 2 ll. 11-13) οὐκοῦν ... κακόν（q: edd.）14. 350b (fol. 12v col. 1 ll. 3-6) οὐκοῦν ... πλεονέκτει（f: Musurus; comma: Bekker; q: c. (post ἢ οὐχ οὕτωσ ἔλεγεσ f: Musurus; q: c. & A)） 15. 351e-352a (fol. 13r col. 1 ll. 35-44) οὐκοῦν ... δικαίωι (f: Musurus, Stephanus, Schneider; q: c. (post οὐχ οὕτωσ q: edd. & A) 16.** 353c (fol. 13v col. 2 ll. 16-19) οὐκοῦν ... ἀπεργάσεται（q: edd.）17.** 353e (fol. 13v col. 2 l. 43 - fol. 14r col. 1 l. 2) 先行する相手の発言への言及を含む文 οὐκοῦν ... συνεχωρήσαμεν ... ἀδικίαν（f: Musurus; q: edd.）

6.2 表明されていない相手の信念・態度・発言に言及する文

話者が疑問を選択するか断定を選択するか、皮肉な表現を選択するかは、 οὐκοῦν の場合と同じ。

6.2.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 327c (fol. 3r col. 1 ll. 33-34) ὁρᾶισ οὖν ἡμᾶσ ἔφη ὅσοι ἐσμέν (q: edd.) 2. 329 c (fol. 3v col. 2 ll. 16-17) ἔτι οἷόσ τε εἶ γυναικὶ συγγίγνεσθαι (q: edd.) 3. 332b (fol. 5r col. 1 ll. 7-8) οὐχ οὕτω λέγειν φὴισ τὸν σιμωνίδην (q: edd.) 4. 333a (fol. 5r col. 2 ll. 22-23) πρόσ γε ... ἂν οἶμαι φαίησ κτῆσιν (q: Musurus, Burnet, Chambry, Slings; f: c.) 5. 335c (fol. 6r col. 2 ll. 13-17) 小辞 δέ をともなう文 述語動詞を否定する否定辞 μή をともなう ἀνθρώπουσ δὲ ... μὴ οὕτω φῶμεν ... γίγεσθαι (q: edd.) 6. 335e (fol. 6v col. 1 ll. 10-15) μαχούμεθα ἄρα ... κοινῆι ἐγώ τε καὶ σύ, ἐὰν ... ἀνδρῶν (q: Adam; f: c.) 7. 336a (fol. 6v col. 1 ll. 17-21) 相手の先行する応答に言及する小辞 αλλά で始まる文 ἀλλ᾽ οἶσθα ...βλάπτειν (q: edd.) 8. 337c (fol. 7r col. 1 ll. 40-42) 推移・推論の小辞 οὖν をともなう文 ἄλλο τι οὖν ... ποιήσεισ, ὧν ἐγὼ ἀπεῖπον, τούτων τι ἀποκρινηι (q: edd. (... ποιήσεις; ... ἀποκρινῇ;Stephanus ... ποιήσις; ...ἀποκρινῇ [Ficinus], Stallbaum, Hermann, Slings ... ποιήσεις; ... ἀποκρινεῖ; Bekker, Ast, Schneider, Baiter, Jowett & Campbell, Adam, Shorey, Chambry ποιήσεις· ἀποκρινῇ ; Musurus; ποιήσεις· ἀποκρινῇ Burnet)) 9. 338d (fol. 7v col. 1 ll. 39-43) εἶτ᾽ οὐκ οἶσθ᾽ ...ὅτι ... ἀριστοκρατοῦνται (f: Musurus; q: c.) 10. 339e (fol. 8r col. 1 ll. 25-37) οἴου ... προσέταξαν ἆρα ... ἢ ὃ σὺ λέγεισ (q: edd.; post προσέταξαν nq: edd. (f: Ficinus, Stephanus, Bekker, Jowett & Campbell)) 11. 340c (fol. 8r col. 2 ll. 37-40) ἀλλὰ ... με οἴει ...ἐξαμαρτάνηι (q: edd.) 12. 340d (fol. 8v col. 1 ll. 1-4) ἐτεὶ αὐτίκα ... καλεῖσ ...ἐξαμαρτάνει· ἢ λογιστικόν, ὃσ ... ἁμαρτίαν (f: Ficinus; q: c. (post ἐξαμαρτάνει nq: Musurus, Bekker, Ast, Schneider; q: c.)) 13. 341a (fol. 8v col. 1 ll. 37-38) δοκῶ σοι συκοφαντεῖν (q: edd.) 14. 341a (fol. 8v col. 1 ll. 38-41) οἴει γάρ με... ὡς ἠρόμην (q: edd.) 15.* 343c (fol. 9v col. 1 ll. 28-31) καὶ οὕτω πόρρω εἶ ... ἀδικίασ (comma: edd.; see also 6.2.2.10) 16. 344e (fol. 10r col. 2 ll. 3-7) ἢ σμικρὸν ... οἴει ... ζωὴν ζῶν (q: edd. ζωῇ Musurus ζώη Stephanus ζῳ᾽ c.) 17. 345e (fol. 10v col. 1 ll. 30-33) σὺ δὲ... οἴει ἄρχειν (q: edd.) 18. 346b (fol. 10v col. 2 ll. 10-12) αὐτὴ γὰρ ...δύναμισ· ἢ ... καλεῖσ（f: Musurus; q: edd.）19. 347a-b (fol. 11r col. 1 ll. 38-44) τὸν τῶν βελτίστων ἄρα ... οὐ ξυνιεῖσ; δι᾽ ὃν ...ἄρχειν; ἢ οὐκ οἶσθα ... ἔστιν (q: edd. (post ξυνιεῖσ nq: edd.; post ἄρχειν q: Ast; f: c.)) 20. 348a (fol. 11v col. 1 ll. 12-14) 相手の先行する応答に言及する、推移・推論または強調の小辞 οὖν をともなう文 βούλει οὖν

...πείθωμεν, ... λέγει (q: edd.) 21. 348c (fol. 11^{v} col. 1 ll. 39-41) τὸ μέν που ἀρετὴν ... καλεῖσ ... κακίαν (q: edd.) 22. 348d (fol. 11^{v} col. 2 ll. 5-6) 相手の先行する応答に言及する ἄρα をともなう文 τὴν ἀδικίαν ἄρα ... καλεῖσ (q: edd.) 23.* 348d (fol. 11^{v} col. 2 ll. 13-15) σὺ δὲ οἴει με ...λέγειν (写本 A、Baiter は ll. 13-15 の後で話者の交代が起こる) (f: edd.) 24. 349d-e (fol. 12^{r} col. 2 ll. 6-7) μουσικὸν ... λέγεισ ... ἄμουσον (q: edd.) 25. 349e (fol. 12^{r} col. 2 ll. 14-20) δοκεῖ ... σοι ... ἔχειν (q: edd.) 26. 353b (fol. 13^{v} col. 1 ll. 41-42) ὀφθαλμῶν ... ἔργον (q: edd.) 27. 353d (fol. 13^{v} col. 2 ll. 20-21) τίθεμεν ...λόγον (q: edd.) 28. 353d (fol. 13^{v} col. 2 ll. 33-35) οὐκοῦν で始まる文 οὐκοῦν ... φαμέν ... εἶναι (q: edd.)

6.2.2 疑問符が付されていない場合

『国家』第 1 巻 1.** 333a (fol. 5^{r} col. 2 ll. 28-29) ξυμβόλαια δὲ λέγεις κοινωνήματα· ἢ τι ἄλλο (f: Musurus; q: c.) 2.** 333c (fol. 5^{v} col. 1 ll. 11-13) οὐκοῦν λέγεισ ...κεῖσθαι (q: edd.) 3.** 333d (fol. 5^{v} col. 1 ll. 21-27) 小辞 δέ をともなう文 φήσεισ δὲ ... μουσικήν (q: edd.) 4. 334d (fol. 6^{r} col. 1 ll. 2-5) κατὰ δὴ τὸν σοὶ λόγον ... κακῶσ ποιεῖν (f: edd.) 5.** 337c (fol. 7^{r} col. 1 ll. 35-40) εἰ δ᾽ οὖν ..., οἴει ... ἐάντε μή (q: edd.) 6. 339d (fol. 8^{r} col. 1 ll. 10-14) ἄρα をともなう文 οὐ μόνον ...ἀλλὰ ... の文 οὐ μόνον ἄρα... κατὰ τὸν σὸν λόγον ...ἀλλὰ ... , τὸ μὴ ξυμφέρον (f: edd.) 7.** 339d (fol. 8^{r} col. 1 ll. 17-24) οὐχ ὡμολόγηται ... βελτίστου; ἃ δ᾽ ἄν ... ποιεῖν· ταῦτ᾽ οὐχ ὡμολόγηται (q: edd. (post βελτίστου q: Musurus; comma: c. post ποιεῖν q: edd.) 8. 340d (fol. 8^{r} col. 2 l. 43-fol. 8^{v} col. 1 l. 1) συκοφάντησ γὰρ εἶ ... λόγοις (comma: Bekker; semicolon: c.) 9.** 341c (fol. 8^{v} col. 2 ll. 15-18) οἴει γὰρ ἄν με ... θρασύμαχον (f: Musurus; q: c.) 10. 343c (fol. 9^{v} col. 1 l. 28-fol. 9^{v} col. 2 l. 1) καὶ οὕτω πόρρω εἶ .. ἀδικίασ; ὥστε ... ὁπωστιοῦν (f: edd.) 11.** 346b (fol. 10^{v} col. 2 ll. 12-19) ἢ ἐάνπερ ... καλεῖσ ... ἰατρικήν (f: Musurus; q: c.) 12. 346c (fol. 10^{v} col. 2 ll. 32-37) 間接話法による応答 συνέφη で応答される文　相手の先行する応答に言及する小辞 δέ をともなう文 φαμὲν δέ γε ... αὐτοῖσ (f: edd.) 13.** 348a (fol. 11^{v} col. 1 ll. 8-10) ἤκυσασ ... ἀδίκου (q: edd.) 14. 348e (fol. 11^{v} col. 2 ll. 33-39) νῦν δὲ δῆλοσ εἶ ὅτι φήσεισ ... θεῖναι (f: edd.) 15. 353a (fol. 13^{v} col.1 ll.29-34) οἶμαι をともなう文 νῦν δὴ οἶμαι ... ἂν μάθοισ ἀπεργάζηται (f: edd.)

6.3 先行する発言に付言する小辞 ἄρα

先行する対話相手の発言に付言する場合、相手の関与する命題からの論理的帰結に関して、οὐκοῦν の場合と同じことが考えられる。

6.3.1 疑問符が付されている場合

6.3.1.1 ἄρα ... οὐκ ...

『国家』第 1 巻 1.* 347a (fol. 11^{r} col. 1 ll. 38-39) τὸν τῶν βελτίστων ἄρα ... οὐ ξυνιεῖσ (nq: edd. see also 6.2.1.19) 2.* 350b (fol. 12^{r} col. 2 ll. 41-44) ὁ ἄρα ἀγαθὸσ ... οὐκ ἐθελήσει πλεονεκτεῖν, ... ἐναντίου (q: Musurus; f: c.)

6.3.1.2 οὐκ ἄρα ... ἀλλὰ ...

『国家』第 1 巻 1.* 335d (fol. 6r col. 2 ll. 38-41) οὐκ ἄρα τοῦ δικαίου βλάπτειν ἔργον, ..., οὔτε ..., ἀλλὰ ... τοῦ ἐναντίου, τοῦ ἀδίκου (f: edd.) 2.* 342c (fol. 9r col. 1 ll. 41-43) οὐκ ἄρα ... ἀλλὰ σώματι (f: edd.) 3.* 342c-d (fol. 9r col. 2 ll. 9-14) οὐκ ἄρα ... ἀλλὰ ...ἑαυτήσ (f: edd.)

6.3.1.3 ἄρα

『国家』第 1 巻 1. 332e (fol. 5r col. 2 ll. 17-18) 添加の小辞 καί をともなう文 χρήσιμον ἄρα καὶ ἐν εἰρήνηι δικαιοσύνη (f: Ficinus, Musurus, Stephanus; q: c.) 2.* 334a (fol. 5v col. 2 ll. 3-5) ὅτου τις ἄρα ... δεινόσ (f: edd.) 3. 335b (fol. 6r col. 1 l. 44 - fol. 6r col. 2 l. 2) ἔστιν ἄρα ... ἀνθρώπων (q: edd.) 4.* 335c (fol. 6r col. 2 ll. 19-22) 添加の小辞 καί をともなう文 καὶ τοὺς βλαπτομένουσ ἄρα ...γίγνεσθαι (f: edd.) 5. 335e (fol. 6v col. 1 ll. 10-15) μαχούμεθα ἄρα ... κοινῆι ἐγώ τε καὶ σύ, ἐαν ... ἀνδρῶν (q: Adam; f: c.) 6. 348d (fol. 11v col. 2 ll. 5-6) τὴν ἀδικίαν ἄρα ... καλεῖσ (q: edd.)

6.3.2 疑問符が付されていない場合

6.3.2.1 οὐκ ἄρα ...

『国家』第 1 巻 1. 331d (fol. 4v col. 2 ll. 2-5) οὐκ ἄρα οὗτος ὅροσ ... ἀποδιδόναι (f: edd.)

6.3.2.2 οὐκ ἄρα ... ἀλλά ...

『国家』第 1 巻 1. 342e (fol. 9r col. 2 ll. 28-32) οὐκ ἄρα ὅ γε τοιούτοσ ..., ἀλλὰ ... ἀρχομένωι (f: edd.) 2. 346c-d (fol. 10v col. 2 l. 38 - fol. 11r col. 1 l. 4) οὐκ ἄρα ἀπὸ τῆσ αὑτοῦ τέχνησ ...· ἀλλὰ ... οὕτωσ· τὸ ἀυτὴσ .... τέτακται (f: edd.) cf. 342e (fol. 9r col. 2 ll. 33-43) οὐκοῦν ... οὐδὲ ἄλλοσ οὐδεὶσ ..., ἀλλὰ ... ἅπαντα (f: edd.)

6.3.2.3 οὐ μόνον ἄρα... ἀλλά ...

『国家』 第 1 巻 1. 339d (fol. 8r col. 1 ll. 10-14) οὐ μόνον ἄρα ... κατὰ τὸν σὸν λόγον ... ἀλλὰ ..., τὸ μὴ ξυμφέρον (f: edd.)

6.3.2.4 ἄρα

『国家』第 1 巻 1. 332b-c (fol. 5r col. 1 ll. 15-18) ὡς ἔοικεν をともなう文 ἠνίξατο ἄρα ... ὡς ἔοικεν ... ὃ εἴη (f: edd.) 2.** 332d (fol. 5r col. 1 ll. 41-43) τὸ τοὺς φίλουσ ἄρα εὖ ποιεῖν ... λέγει (f: Ficinus, Stephanus ; q: c.) 3.** 333c-d (fol. 5v col. 1 ll. 14-16) ὅταν ἄρα ... δικαιοσύνη (f: Musurus; q: c.) 4. 334a (fol. 5v col. 2 ll. 5-7) εἰ ἄρα ..., καὶ κλέπτειν δεινόσ (comma: Musurus; f: c.) 5. 334a-b (fol. 5v col. 2 ll. 9-10) ὡς ἔοικεν をともなう文 κλέπτησ ἄρα τισ ὁ δίκαιοσ, ὡσ ἔοικεν, ἀναπέφανται (nq: edd.) 6. 334c (fol. 5v col. 2 ll. 39-41) τούτοισ ἄρα ... φίλοι (f: Ficinus, Musurus, Bekker, Ast; q: c.) 7. 334d-e (fol. 6r col. 1 ll. 10-16) πολλοῖσ ἄρα ... συμβήσεται ... δίκαιον εἶναι τοὺσ μὲν φίλουσ βλάπτειν· πονηροὶ γάρ

αὐτοῖσ εἰσιν· τοὺσ δ᾽ ἐχθροὺσ ὠφελεῖν (nq: edd.) 8. 335e (fol. 6r col. 2 l. 43-fol. 6v col. 1 l. 6) γάρ の文が続く εἰ ἄρα τὰ οφειλόμενα ...ὠφελίαν, οὐκ ἦν σοφὸσ ὁ ταῦτα εἰπών (nq: edd.) 9. 346c (fol. 10v col. 2 ll. 27-32) δῆλον ὅτι ... 確言を示す句をともなう ἥντινα ἄρα ..., δῆλον ὅτι ...ὠφελοῦνται (f: edd.) 10. 349d (fol. 12r col. 2 ll. 2-4) τοιοῦτος ἄρα ... ἔοικεν (q: Schneider, Burnet, Chambry, Slings; f: c.) 11. 350c (fol. 12v col. 1 ll. 17-20) ὁ μὲν ἄρα δίκαιοσ ἡμῖν ἀναπέφανται ... κακόσ (f: edd.) 12. 353e (fol. 13v col. 2 ll. 39-43) ἀνάγκη ἄρα ... εὖ πράττειν (f: edd.) 13. 353e (fol. 14r col. 1 ll. 3-5) ἡ μὲν ἄρα δικαία ψυχὴ ... ἄδικοσ (f: edd.) 14. 354a (fol. 14r col. 1 ll. 9-10) ὁ μὲν δίκαιοσ ἄρα ... ἄθλιοσ (f: edd.) 15. 354a (fol. 14r col. 1 ll. 13-15) οὐδέποτ᾽ ἄρα ... δικαιοσύνησ (f: edd.)

6.4 相手の応答に基づいて、対照を示す小辞 ἀλλά を用いて、前言と対照的な命題に言及する文

6.4.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 333b (fol. 5r col. 2 ll. 33-37) 反「常識」命題を内含する文 ἀλλ᾽ εἰς πλίνθων ... οἰκοδομικοῦ (q: edd.) 2. 334a (fol. 5v col. 1 l. 43- fol. 5v col. 2 l. 3) 小辞 μήν をともなう文 ἀλλὰ μὴν στρατοπέδου γε ...πράξεισ (q: Burnet, Chambry, Slings; f: c.) 3. 334d (fol. 6r col. 1 ll. 1-2) 小辞 μήν をともなう文 ἀλλὰ μὴν οἵ γε ἀγαθοὶ δίκαιοί τε καὶ οἷοι μὴ ἀδικεῖν (q: Burnet, Chambry, Slings; f: c.) 4. 335c (fol. 6r col. 2 ll. 17-19) 反「常識」命題を内含する文 ἀλλ᾽ ἡ δικαιοσύνη οὐκ ἀνθρωπεία ἀρετή (q: edd.) 5. 335c (fol. 6r col. 2 ll. 25-26) 因果同名観から偽と直感される命題を内含する文 ἀλλὰ τῆι ἱππικῆι οἱ ἱππικοὶ ἀφίππουσ (q: edd.) 6. 335c-d (fol. 6r col. 2 ll. 27-30) 因果同名観から偽と直感される命題を内含する文 ἀλλὰ τῆι δικαιοσύνηι δὴ οἱ δίκαιοι ἀδικούσ· ἢ καὶ συλλήβδην ἀρετῆι οἱ ἀγαθοὶ κακούσ (q: edd. (post ἀδικούς q:edd.))

6.4.2 疑問符が付されていない場合

『国家』第 1 巻 1. 334c-d (fol. 5v col. 2 ll. 41-44) ἀλλ᾽ ὅμωσ δίκαιον ... βλάπτειν (q: Schneider, Adam, Burnet, Shorey, Chambry, Slings; f: c.) 2. 342c (fol. 9r col. 2 ll. 4-7) 小辞 μήν をともなう文 ἀλλὰ μὴν, ὦ θρασύμαχε, ἄρχουσί γε ... εἰσιν τέχναι (f: edd.) 3. 349b-c (fol. 12r col. 1 ll. 19-23) ἀλλ᾽ οὐ τοῦτο ... ἐρωτῶ, ἀλλ᾽ εἰ ... ἀδίκου (f: Ficinus, Stephanus, Bekker, Schneider; q: c.) 4. 350c (fol. 12v col. 1 ll. 13-16) 小辞 μήν をともなう文 ἀλλὰ μὴν ὡμολογοῦμεν· ὦι γε ... εἶναι (f: edd.) 5. 354a (fol. 14r col. 1 ll. 6-8) 小辞 μήν をともなう文 ἀλλὰ μὴν ὅ γε εὖ ζῶν ... τἀναντία (f: edd.) 6. 354a (fol. 14r col. 1 ll. 11-12) 小辞 μήν をともなう文 ἀλλὰ μὴν ἄθλιόν γε εἶναι οὐ λυσιτελεῖ, εὐδαίμονα δέ (f: edd.)

6.5 相手の応答を前提として、それに続いて、添加の小辞 καί かつ／あるいは省略文を用いて、類比命題への相手の関与に言及する文

6.5.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1.* 332e (fol. 5r col. 2 ll. 11-12) 小辞 μήν をともなう文 μὴ κάμνουσί γε μήν, ...,᾽ιατρὸς

ἄχρηστοσ (f: edd.) 2.* 332e (fol. 5r col. 2 ll. 13-14) καὶ μὴ πλέουσι δὴ κυβερνήτησ (q: Musurus; f: c.) 3. 333a (fol. 5r col. 2 ll. 19-20) πρόσ γε καρποῦ κτῆσιν (q: Musurus, Bekker, Ast, Burnet, Shorey, Chambry, Slings; f: c.) 4. 333a (fol. 5r col. 2 ll. 20-21) καὶ μὴν καὶ σκυτοτομική (q: edd.) 5. 333d (fol. 5v col. 1 ll. 20-21) καὶ ὅταν δὴ δρέπανον ...· ὅταν δὲ χρῆσθαι, ἡ ἀμπελουργική (f: Musurus; q: c.) 6. 341d (fol. 8v col. 2 ll. 37-40) 文否定の否定辞 οὐ をともなう文 οὐ καὶ ἡ τέχνη ... ἐκπορίζειν (f: Musurus; q: c.)

6.5.2 疑問符が付されていない場合

『国家』第 1 巻 1. 333c (fol. 5v col. 1 ll. 4-6) 小辞 μήν をともなう文 καὶ μὴν ὅταν γε ...ἢ ὁ κυβερνήτησ (q: Ficinus, Burnet, Slings; f: c.) 2.** 333d (fol. 5v col. 1 ll. 27-31) καὶ περὶ τἆλλα ... χρήσιμοσ (f: Ficinus, Musurus, Stephanus; q: c.) 3. 352b (fol. 13r col. 2 ll. 10-13) καὶ θεοῖσ ἄρα ...φίλοσ (f: edd.)

6.6 相手の応答または否定的事実を前提として、否定の添加の小辞 οὐδέ を用いて、類比命題への相手の関与に言及する文

6.6.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1.* 328c (fol. 3r col. 2 ll. 37-39) οὐδὲ θαμίζεισ ... εἰς τὸν πειραιᾶ (nq: edd. (οὐδὲ Baiter, Jowett & Campbell, Burnet)) 2. 332a (fol. 4v col. 2 ll. 34-37) ἀποδοτέον δέ γε οὐδ᾽ ... ἀπαιτοῖ (f: Ficinus, Musurus; q: c.) 3.* 335d (fol. 6r col.2 ll. 32-34) οὐδὲ ξηρότητοσ ὑγραίνειν ἀλλὰ τοῦ ἐναντίου (f: edd.) 4.* 335d (fol. 6r col. 2 ll. 34-36) οὐδὲ δὴ τοῦ ἀγαθοῦ βλάπτειν ἀλλὰ τοῦ ἐναντίου (f: edd.)

6.6.2 疑問符が付されていない場合

『国家』 第 1 巻 1. 342c (fol. 9r col. 1 l. 43 － fol. 9r col. 2 l.3) οὐδὲ ἱππικὴ ἱππικῆι ἀλλ᾽ ἵπποισ· οὐδὲ ἄλλη τέχνη οὐδεμία ἑαυτῆι οὐδὲ γὰρ προσδεῖται, ἀλλ᾽ ἐκείνωι οὗ τέχνη ἐστίν (f: edd.) 2. 346b (fol. 10v col. 2 ll. 20-21) οὐδὲ γ᾽ , οἶμαι, τὴν μισθωτικήν, ... μισθαρνῶν (f: edd.)

6.7 相手の応答による相手の関与に続いて、小辞 δέ によって、連接して、あるいは、対照して、新たな命題に言及する文

6.7.1 疑問符が付されている場合

『国家』 第 1 巻 1. 335d (fol. 6r col. 2 ll. 36-37) ὁ δέ γε δίκαιοσ ἀγαθόσ (q: edd.) 2. 339 c (fol. 8r col. 1 ll. 8-10) ἃ δ᾽ ἂν ... δίκαιον (f: Ficinus; q: c.) 3. 346d (fol. 11r col. 1 ll. 5-7) ἐὰν δὲ ... τέχνησ (q: edd.) 4. 350a (fol. 12r col. 2 ll. 25-26) μὴ ἰατρικοῦ δέ (q: edd.) 5.* 350a (fol. 12r col. 2 ll. 26-33) περὶ πάσης δὲ ὅρα ... εἰ ...πρᾶξιν (f: edd. 間接疑問文) 6. 350b (fol. 12r col. 2 l. 39) ὁ δὲ ἐπιστήμων σοφόσ (q: edd.) 7. 350b (fol. 12r col. 2 l. 40) ὁ δὲ σοφὸς ἀγαθόσ (q: edd.) 8.* 350b (fol. 12v col. 1 ll. 1-2) ὁ δὲ κακόσ ... ἐναντίου (q: Musurus; f: c.) 9. 352a (fol. 13r col. 2 ll. 9-10) δίκαιοι δὲ γ᾽ εἰσίν ... θεοί (q: edd.)

6.7.2 疑問符が付されていない場合

『国家』第 1 巻 1. 349d (fol. 12r col. 1 ll. 37-40) ἔστιν δέ γε ... οὐδέτερα (q: Bekker, Burnet, Chambry, Slings; f: c. (ἔστι Bekker, Ast, Baiter)) 2.** 350c (fol. 12v col. 1 ll. 7-9) ὁ δέ γε δίκαιοσ ... τοῦ δὲ ἀνομοίου (f: Ficinus; q: c.)

6.8 断定を避けた信念表明の挿入句 οἶμαι をともなう文

6.8.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 333a (fol. 5r col. 2 ll. 22-23) πρόσ γε ὑποδημάτων ἂν οἶμαι φαίησ κτῆσιν（q: Musurus, Burnet, Chambry, Slings; f: c.）2.* 335d (fol. 6r col. 2 ll. 30-32) οὐ ... ἀλλά ... をともなう文 οὐ γὰρ θερμότητοσ οἶμαι ἔργον ψυχεῖν ἀλλὰ τοῦ ἐναντίου (f: edd.)

6.8.2 疑問符が付されていない場合

『国家』第 1 巻 1. 340d (fol. 8v col. 1 ll. 8-17) ἢ ... ἁμαρτιάν; ἀλλ᾽ οἶμαι λέγομεν τῶι ῥήματι οὕτωσ ... ὁ γραμματιστήσ· τὸ δ᾽ οἶμαι ... ἁμαρτάνει· ἐπιλειπούσησ γὰρ ... (nq: edd.) 2. 341d (fol. 8v col. 2 ll. 29-32) γὰρ の文が続く οὐδὲν οἶμαι ... ναύτησ (nq : edd.) 3. 346b (fol. 10v col. 2 ll. 20-21) οὐδέ γ᾽, οἶμαι, τὴν μισθωτικήν, ... μισθαρνῶν (f: edd.) 4. 353a (fol. 13v col. 1 ll. 24-27) ἀλλ᾽ οὐδένι γ᾽ ἄν οἶμαι ... ἐργασθέντι (f: edd.) 5. 353a (fol. 13v col. 1 ll. 29-34) νῦν δὴ οἶμαι ἄμεινον ἂν μάθοις ... πυνθανόμενοσ εἰ ... ἀπεργάζηται (f: edd.)

「非挿入句：」1. 336a (fol. 6v col. 1 ll. 22-26) οἶμαι ... ἀνδρόσ· ἀληθέστατα, ἔφη, λέγεισ (f: edd.) 2. 344e (fol. 10r col. 2 ll. 7-9) ἐγὼ γὰρ οἶμαι ... τουτὶ ἄλλωσ ἔχειν (f: Ast, Schneider, Jowett & Campbell; q: c.)

6.9 そのほか

6.9.1 疑問符が付されている場合

『国家』第 1 巻 1. 328a (fol. 3r col. 2 ll. 1-2) 相手の質問の一部への言及 ἀφ᾽ ἵππων ἣν δ᾽ ἐγώ (q: pos ἐγώ Musurus; post ἵππων c.) 2. 328a (fol. 3r col. 2 ll. 3-5) λαμπάδια ... τοῖς ἵπποισ (nq: Musurus; q: c.)

6.9.2 疑問符が付されていない場合

『国家』第 1 巻 1. 335a (fol. 6r col. 1 ll. 31-33) ὡς ἔοικε による間接的な疑問 φίλοσ μὲν δή, ὡσ ἔοικε, ... ὁ πονηρόσ (f: edd.) 2. 337c (fol. 7r col. 1 ll. 33-34) εἶεν, ἔφη, ὡσ δὴ ὅμοιον τοῦτο ἐκείνωι (q: Ficinus, Stephanus; f: c.) 3. 342b (fol. 9r col. 1 ll. 27-38) ἢ οὔτε ... σκοπεῖν ·οὔτε γὰρ ... οὐδε ... ἐστίν (f: Musurus, Bekker, Ast; q: c. (post σκοπεῖν q: Ficinus, Stephanus, Bekker, Ast; nq: c.)) 4. 348b (fol. 11v col. 1 ll. 30-31) ὁποτέρωσ οὖν σοι... ἀρέσκει (q: Ficinus, Stephanus, Ast, Bekker, Schneider, Stallbaum, Jowett &

Campbell; f: Musurus, Baiter, Adam, Burnet, Chambry (F： ποτέρωσ ποτέρως; οὖν σοι... ἀρέσκει; Hermann, Shorey ποτέρως οὖν σοι... ἀρέσκει; Slings)) 5. 349c (fol. 12r col. 1 ll. 27-28) ὅσ γε ...ἀξιοῖ (q: Stephanus, Bekker, Ast, Schneider, Burnet, Chambry, Slings; f: c.)

7 「疑問符」が付された基準とそのプラトン解釈上の意義

「疑問符」とみなされてきた符号が付されている箇所について、文法的・意味論的に明示的に疑問文の特徴がある個所から考察すると、まず 5.1 疑問詞のある個所について、「疑問符」が付されている場合と付されていない場合の数は、21：67 である。疑問詞か不定代名詞かは、アクセントと語順とで区別されるが、アクセントにおいて疑問詞とみなしていても「疑問符」を付していないことの方が圧倒的に多い。疑問詞のある文に「疑問符」を打たないのであるから、この符号を疑問符と呼んでよいかは問題である。ただし、Gardthausen は、疑問符は文法的特徴のあるところで必ずしも付されていないと報告している（Ⅱ 406）。そこで、調査の現段階ではこの経験知に従うとすると、なおこの符号を疑問符とみなす仮説を維持するためには、「選択的に付されている」という仮説を付け加えねばならない。そうすると、5.2 疑問の小辞の場合、20：7、5.3 相手に答えることを命令・勧奨する文に続く文の場合、13：3、5.4 と 5.5 の選言命題や矛盾命題にかかわる場合の合計 5：5 は、どう説明されるべきか。「一貫して」とは言えまい。また、「無作為に」というならば、もはや疑問符と一つの符号に分類できなかろう。従って、「覚書として」と言うに留まろう。

それでは、「覚書として」、文法的・意味論的に明示的な特徴を有しないところでも、なお疑問符たりえているであろうか。確かに、逐一疑問符を付していなくても咎められないという前提を受け入れる限りでは、6.1-6.9 で、疑問符が付されていなくても、また、調査した 19 世紀以降の諸校訂と不一致でも、有用性は認められないものの、疑問符の資格を奪われることはない。しかし、疑問符を付してある場合どうであろうか。疑問符を付してある個所の数に対する 19 世紀以降の諸校訂との不一致の数は、6.1 οὐκοῦν で始まる文：0/8、6.2 表明されていない相手の信念・態度・発言に言及する文：2/28、6.3.1.1 ἄρα ... οὐκ ...：2/2、6.3.1.2 οὐκ ἄρα ... ἀλλὰ ... 3/3、6.3.1.3 単純な ἄρα：2/6、6.4 小辞 ἀλλά で始まる文：0/6、6.5 添加の小辞 καί 並びに省略文：2/6、6.6 否定の添加の小辞 οὐδέ の文：3/4、6.7 小辞 δέ で始まる文：2/9 となる。これをどう評価すべきか。もちろん、近代校訂諸家の判断と比較しても、6.1、6.4、6.5、6.7 では、疑問符を付す判断の妥当性を評価し得る。そのほかは、その妥当性に大きな疑義を挟む余地があるが、しかし、間接疑問を疑問とする 6.7.1.5 について、現代の句読法の流儀から、「誤り」と判定し得るように、疑問符を付する上での判断の「誤り」と考えれば、全体として「覚書として」疑問符を付しているとする仮説を斥けることはできまい。

それでは、6.3、6.6 も含めて、この覚書としての疑問符について、その疑問符を付する判断基準は何か。それは、これらに共通な要素を要約することとなるから、すでに分類記述の時点で含意されているように、話者が対話相手の表明されていない信念、態度、発言に直接、間接に言及し、その関与 commitment を対話相手の意向に委ねていることとなろう。

それでは、6.3、6.6 に見られる、写本Ａの疑問符を付することの判断者、恐らく写字生の傍らにいる指示者、この人に由来する解釈の特異な点はどのようなことがらであろうか。それは、論争文学一

般に言い得る、論敵に反対意見を提示する οὐ ... ἀλλὰ ... の形式についても、この解釈は「ソクラテスが問うている」と判断するところにある。文脈的には連接する 6.8.1.2　335d における、小辞 γάρ、並びに、断定を避けた信念表明の挿入句 οἶμαι を伴う、οὐ ... ἀλλὰ ... の形式の文にわざわざ疑問符を付している事と連携する問題である。その内容においては、いずれも、対話相手の論駁の要となる同名因果観への関与に「疑問符を付す」ことである。このことは、徹底してソクラテスを問う人とみなし、対話の表層における相互の意見の一致と見える状況をも、話者の表情等の間接的な言語行為を通じて、単なる一致と見ることからずらそうとすることにつながる。フォティオス影響下のビザンツ帝国 9 世紀に、このような解釈があると言えるならば、それは、解釈史上重要な示唆と言えよう。

しかしながら、こうした特異な疑問符の存在は、却って、このような説得や意見の一致という表層には、対話者間の構造的なずれがあるということを、疑問符という書記法なしに、既にプラトンが、自身の原テキストの内に書き表している可能性を照らし出すことになると思われる。

第一に、確かに、ポレマルコスとの対話では、ソクラテスがポレマルコスの信念を吟味して、その信念間の相互矛盾が明らかになる。しかし、トラスュマコスとの対話では、そればかりでなく（331e, 339d）、ソクラテス自身の立場を論証するということも行われている（345a; 347a; 347e-348a; 351a）。このことは、第 2 巻で、事後的言及として、聴衆グラウコン、アデイマントスによって「説得」として（357a）、また、ソクラテスによって、「説得」並びに「証示」として（368b）、記述されている[6]。従って、ソクラテスが持説への関与を全く表明していないとするテキストの読みには無理がある。実際同名因果観は第 2 巻以降たびたびソクラテスによって提起される (*e.g.* 430e; 444c-d; cf. 436e-437a; 439b)。しかしながら、第 1 巻における、表層における言葉の上での意見の一致が、体系的な一致でもあったかと問えば、否であることは、第 2 巻冒頭のグラウコン、アデイマントスのトラスュマコス説の展開、そしてそれに応ずるソクラテスの以後の弁明から（545a-b; 588b ff.）明らかである[7]。

第二に、疑問符並びに体系的な句読法がないという書記法の制約において、文法的、意味論的、語用論的に、劇作内で対話者によって問いが直接、間接に行われていることを、プラトンが明示する方法は、実に多岐に亘っている、このことは本報告からも明らかであるが、それにもかかわらず、疑問文とも断定文とも決められぬ文を、プラトン自身が読者の解釈に委ねていると考える可能性は、否定できぬところがある。例えば、直接話法の応答様式において、 ἀληθῆ λέγεις 型の応答は、内含される命題に関する話者の関与の可能性を一切表示しない疑問文、例えば単純な ἆρα 文への応答には、ほ

---

[6] 対話相手の信念を吟味する純粋の問いとは異なる、疑問文による間接的な主張を用い、対話相手の同意を得ることによって説得することの表現形式は、589c-d に見られる。

[7] グラウコン、アデイマントスとソクラテスとの間の意見の一致については、相互の意見の一致は言葉の上でも明確に確認されているし（*e.g.* 434a; 436c; 437a）、また 8 巻冒頭部では、先行の同意事項が確認されているし（543a-c）、更には、「脱線」部分の５－７巻でも同意が図られ（e.g. 511e; 523a-b）言葉の選択の上でもプラトン『国家』に特異な συνοίομαι が際立つ (500a8; 500b1; 517c6, c7; 537c8（以下行数はバーネット版））が、それにもかかわらず、根底において、善のイデアの性格について一致に到達してはいない（509b）。そのほか、対話における体系的不一致の分析例としては、瀧章次、2003。

とんど用いられていない[8]。すなわち、問い手が疑問によって非関与を表明するのに対して、答え手が応答において話者の関与を示唆するという、問い手と答え手の理解のずれが描かれている。そればかりでなく、実際に、ソクラテスの用いる小辞の言及対象は、ソクラテスにとっては、対話相手の応答において関与した命題であるにしても、他方、対話相手にとっては、言語使用の現場にあって、ソクラテスが問いに内含し、ソクラテスが関与している命題であるというずれが生起している。トラスュマコスは、「君の議論によれば」（353e）と、同意しているようで、実は、問い返している。また、トラスュマコスの非難（336b-337a）、アデイマントスの指摘（487b-d）が示すように、ソクラテスは、問うことをしながら、問うている事柄について、何かをしかけている人として、対話相手に映るように描かれていると考えねばならない（cf. *Apol*. 23a）。

第三に、物語的対話編においては、間接の応答様式 συνέφη、συωμολόγει 等によって、過去の対話を物語る語り手ソクラテスが、その聴衆に対して、「同意」の質に関してその内容を精査するよう示唆している構造がある[9]。

以上のことから、対話者間に、表層の意見の一致があるにもかかわらず、同時に体系的不一致が進捗していることは、読者が疑問符を付することを俟たなくとも、対話を描く技法において、作者プラトンが既に示していると考えることができる。

とはいえ、確かに、写本Aの疑問符に内蔵された解釈の方向は、テキストの生命を伝えている。その疑問符がせいぜい覚書に留まるにせよ、なお、その記憶がさらに遡る伝承によるのか、否か。この更なる問いに答えることを試みるには、9世紀のプラトニストたちの全貌を明らかにすることに俟たねばならない。

---

[8] 詳細は A.Taki "A Chasm underneath the Smoothed Consensus: a note on Plato's idiosyncratic use of ἀληθῆ λέγεις" (unpublished) 2008 （『東京大学西洋古典学研究室紀要』に投稿）。

[9] 瀧章次 , 2004; 同 , 2006

【参考文献】

Adam, J. *The Republic of Plato*. 2 vols. Cambridge, 1902.

Allen, T.W. “Palaeographica Ⅲ. A Group of Ninth-Century Greek Manuscripts. ”*Journal of Philology*, 21(1893):48-55

Ast, F. *Platonis quae exstant opera*. 11 vols. 1819-1832, Leipzig.

Baiter, J.G. *Platonis Opera Omnia* recognoverunt Io. Georgius Baiterus Io. Caspar Orellius Aug. Guil. Winckelmannus. Vol.XIII. Editio sexta. London, 1887.

Bekker, I. *Platonis et quae vel Platonis esse feruntur vel Platonica solent comitari scripta graece omnia* ad codices manuscriptos recensuit variasque inde lections diligenter enotavit Immanuel Bekker. 11 vols. London, 1826.

Boter, G. *The Textual Tradition of Plato's Republic*. Leiden, 1989.

Burnet, J. (ed.) *Platonis Opera*. Vol. 4. Oxford, 1902.

Chambry, É. (ed. and transl.) *La Républic*. 3 vols. (Budé) Paris, 1932.

Ficinus, M. (transl.) see Stephanus. (制作年は 1491 年)

Gardthausen, V. *Griechische Palaeographie*. 2nd ed. 2 vols. Leipzig, 1911.

Hermann, C.Fr. *Platonis Dialogi*. Vol. 4. Leipzig, 1911 (Praefatio の日付は 1852 年。Stallbaum への言及あり。)

Jowett, B. and L. Campbell. *Plato's Republic*. 3 vols. Oxford, 1894. (第 1 巻が校訂テキスト)

Musurus, Marcus. *Omnia Platonis opera*, edited by Aldus Manutius and Marcus Musurus. Venice, 1513.

Oxyrhynchus 455, *Oxyrhynchus Papyri*, III (1903)

Pfeiffer, R. *History of Classical Scholarship*. Oxford, 1968.

PMil Vogliano I 10, *Corpus dei Papiri Filosofici greci e latini*. IV.2 Firenze, 2002

Schneider, C.E.Ch. (ed.) *Platonis opera Graece*. resensuit et adnotatione critica instruxit C.E.Ch. Schneider. Vol.1 *Civitas* Lib. I- Ⅲ. Lipsiae, 1830

Shorey, P. *Plato, the Republic*. 2 vols. (Loeb) Cambridge, Mass. 1930.

Slings, S. R. *Platonis Rempublicam*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit S.L. Slings. Oxford, 2003.

id. *Plato Clitophon*. Cambridge, 1999.

Souilé, J. Platon*, Dialogues suspects*. (Budé) Paris, 1930.

Stallbaum, G. (ed.) *Platonis Politia sive De Republica*. Vol. 1 Gotha and Erfurt, 1858. (Prolegomena の日付は 1857 年。Boter によれば、近い校訂版は、1848-1849 年。)

Stephanus, H. (ed.) *Platonis philosophi* / *Πλατων quae exstant Graece* ad editionem Henrici Stephani accurante expressa cum Marsilii Ficini interpretatione accedit varietas lectionis studiis Societatis Bipontinae. Vol. 6. Zweibrücken, 1784.　(Stephanus 作成テキスト 1578 年)

Thompson, E.M. *An Introduction to Greek and Latin Palaeography*. Oxford, 1912.

id. *A Handbook of Greek and Latin Palaeography*. Chicago, 1966.

Turner, E.G. *Greek Papyri*. Princeton, 1968.

Wilson, N. *Mediaeval Greek Bookhands: Examples Selected from Greek Manuscripts in Oxford Libraries.* Text. Cambridge, Mass., 1973

瀧章次「「ソクラテス」にとって「同意」とは何であったか―プラトンの物語的対話篇における間接話法による応答様式に関する一考察」『東京大学西洋古典学研究室紀要』２ (2006), 27-44

同、Akitsugu Taki "A Note on Cicero's Understanding of Socrates' Irony"『成城文藝』185 号 (2004), 70-104

同、Akitsugu Taki "The Origin of the Lengthy Digression in Plato's *Laws*, Books I and II" *Plato's Laws: From Theory into Practice: Proceedings of the VI Symposium Platonicum: Selected papers*, edited by Samuel Scolnicov and Luc Brisson, Sankt Augustin, 2003: 48-53

納富信留「プラトン『国家』の新しい校訂版について― S.R. Slings, *Platonis Rempublicam*, OCT ―」『フィロロギカ』第 1 号（2006 年）、99-111

同「資料：プラトン『国家』第 1 巻のテクストについて」『フィロロギカ』第 1 号（2006 年）、113-120

A Survey on the Interrogation Marks in Plato's Byzantine Manuscript, graecus Parisinus 1807, fol. 1^{r} col. 1 - fol. 14^{r} col. 1

Akitsugu Taki

Abstract

I survey over the text of the *Clitophon* and *Republic* Book I in fol. 1^{r} col. 1 to fol. 14^{r} col. 1, Parisinus graecus 1807, Plato's 9th-century Byzantine manuscript and Codex A in Bekker's list, *both* the graphical characteristics of the then newly designed interrogation mark, a combination of a comma-type mark with either a colon-type mark, traceable in use to the ancient times as change of speakers, or a middle-height single-dot-type mark, *and* the linguistic distinctions of the sentences preceding such interrogation marks. On the graphical survey I also propose a new hypothesis that the responsibility for the putting of all or most of the comma-type marks as part of the interrogation mark is attributed to the first hand of the manuscript and not to a later one. On this hypothesis, furthermore, I suggest that the linguistic distinctions in using the new device imply not that the first hand had no reasonable standard of distinguishing between interrogation and statement but rather that, although not consistently as in modern editors, it left an interpretive note on the intention of a speaker in the drama when the speech has no distinctive grammatical mark for interrogation. This note, probably attributed to an advisor sitting beside the copyist, points to the 9th century, if not any more earlier, Byzantine Platonists' radical interpretive strategy of deducing an intended systematic incongruity, from the superficial consensus, between the interlocutors Plato dramatically represented. In what follows, I will proffer after an introduction (1) the list of the places where the interrogation mark is put (2), the results of the graphical survey of the interrogation marks there (3), a hypothesis on the hand of the marks (4), the results of the linguistic survey on grammatically marked (5), and unmarked (6), sentences, and their implications on Plato's arts of writing dialogues (7).